はじめに

「人間革命」は謗法の書である。しかしこの「人間革命」が何故謗法の書であるかということに具体的に気付いていない人々が多いのである。その理由は漠然と批判されたり部分的にしか指摘されていないことと創価学会自身が直そうとしていないことによるのである。

今ここに「人間革命」を全体に渡って読み、主要な問題点だけでも摘出して、現在の創価学会の最悪の姿（過去のことは反省もなく忘れよう忘れようとするけんとうはずれの努力と信仰者失格の姿勢）を少しでも御本尊に懺悔して頂く事を願い、指摘するのである。

「人間革命」の大半の読者である創価学会員一人一人、並びに指導書として「人間革命」を用いている創価学会首脳、そして創価学会と協議のもとに改訂版を出すなどと約束しながら出すことなくどこがおかしかったのかも分析せず傍観して喜んでいる宗門首脳、そして自己に酔いしれている著者と称する池田大作氏、いそがしくて読んでいないとする猊下、この悲惨な相関図の中へ「人間革命」の中から一つの指摘をするのであるから、出来るならば反対意見をいただき、益のある討議をしたいものと思うものである。

「人間革命」（現在十巻）は昭和二十年の戸田城聖出獄から筆をおこし、昭和三十一年七月の参議院選挙迄の創価学会並びに戸田城聖・池田大作氏の行動をとどめている書物である。内容は大聖人不在と教義の曲解が横行しているのである。にもかかわらず、

○「人間革命」は単なる小説ではなく信心の一書である。

○「人間革命」は事実にもとづいてそのままを書いた。

○毛沢東は「人間革命」をボロボロになるほど読んでいる。

○「人間革命」（全巻）を真剣に読めば自分自身の人間革命が出来る。

○迷った時（信心や生活）には「人間革命」を何度も読め。

○世間の社長クラスといわれる人々は、聖教新聞や「人間革命」を読んで社員に訓辞をしている。

○大聖人が「立正安国論」を御認（したた）めになられた時は三十八才であった。今池田先生が「人間革命」を書きはじめられたのも三十八才である。

このような口コミが、やがて「人間革命」は現代の御書であるという発言に走って行くのである。しかし「現代の御書」との発言（心で思っている人々は今でもたくさんいる）はたしかになくなったが、前記した滑稽な口コミは現在においてもなにも訂正されていないのである。

謗法の書「人間革命」の中にひそやかに眠っている多大な謗法を、とりあえず主要となっている、

一、創価学会における師弟観

二、創価学会における広宣流布観

この二点をあげて論じてみたい。

創価学会首脳が今日迄詭弁を弄してきた、

「紋切形の引用や読み方であって、脈絡から見れば　そんなことはない」

とか

「あく迄も小説ですから」

という言葉にまぎらわされないように、読みにくいかもしれないけれど、わざと長い引用に企てた。

今日迄に惹き起こされた創価学会の最大最悪の謗法は、正邪を判ずることのない宗門首脳の創価学会擁護の姿勢の為に一層の混乱を呈しているのである。

しかし多大な問題がこの「人間革命」に眠っていることを考え、創価学会員としてでなく、日蓮大聖人の弟子檀那としてはずかしくない成仏を目的とする信念にもとづき真剣に考えていただきたいことを、まず御願いを申し上げるものである。

もともと「人間革命」は創価万代王国という池田大作氏の野望達成の為に、著述されたものであり、仏教要語は使われているものの、それらは仏教の次元から全くはずれている。ましてや、大聖人の仏法とは何等関係のないものとなっており、故にその破折も自然、当家の法門に入る前の外道的な段階で論じるものが多い。

特に本書では、相手の土俵で、その考え方を問い、誡め、破折を加えることを中心としており、飽くまで仏法以前の創価学会の欺瞞性、矛盾を衝いたものと理解していただきたい。

一、創価学会における師弟観

「師弟」の問題は「人間革命」という本の主題ともいえる大きな支柱であろう。

私は当初この「人間革命」なる語句は、成仏ということを一般世間の人々に分り易く知らせる為の異った名称であろうと単純に考えていた。しかし今日の問題を通してこの「人間革命」を繰り返し繰り返し読んで見ると、どうやら「人間成仏」どころの話ではなく、我が身（池田）並びに学会の宣揚と正当化に終始していることが分ったのである。しかし繰り返し読んだ「人間革命」自体にはそれを露骨に表現したものがなかった（ニュアンスとしては充分あった）為に指摘するにはいささか論拠に不足気味であった。しかしその主たる意志を「随筆人間革命」を手に取って見た時に、やはり「人間革命」の執筆は「成仏」を主題にしてのことではないと、断定するに至ったのである。つまり（随筆人間革命〈序にかえて〉）、

「（前文は略）――崇高にして偉大な不出世の戸田城聖という全人格の魂魄を、なんとしても現代の多くの人びとに伝え残そうと心を砕き、一字一字をもって刻んでまいりました。それが拙著「人間革命」であり、いま第九巻まで辿り終ったところであります。（中略）この書をまとめあげたゲラ刷りを読んでも、語り尽くせぬ焦心は、年々いや増すばかりです。生得の日常となった友との激しい対話の日々の折りおり、私はいつもそこに、戸田城聖先生の魂魄が、今もなお潑剌と鮮烈に息づいていることを友と友との顔に人知れず認めずにはいられません。それを悟るにつけても、私の焦心のじれったさは、書き進めばすすむほど激しくなってまいります。（中略）物語はいよいよ戸田先生の晩年、最後の二年半のところにさしかかってきたことです。この期間、先生は正面から社会との対決にはじめて身を晒されました。そして身心の辛労の果てに、今日のわが学会の根元の軌道を、確然と敷設してくださったのであります。この軌道に、己の死を覚知した先生の最後の魂魄がこめられていることはいうまでもない。この先生の魂魄を間近に拝した者の一人として、私はこの追想におののきながら、思索はさらに思索を呼んで今日に及びました。

しかし、私もいつまでも歳月の流れに身をまかせ

てはおられません。先生の魂魄もまた、いよいよ私の執筆を促しています。私は近ぢか、勇気をふるって机に向かいます。勇気はいつの場合でも決意を生み、その決意の極まるところに必死の祈りが生まれるはずです。この祈りこそ、戸田城聖先生の魂魄を文字に刻んで蘇らせる唯一の活力であるにちがいありません。（黒点編者加筆）

昭和五十二年四月二日

戸田城聖二十回忌の日に

池田大作」

このように筆者自ら戸田城聖の魂魄を顕すことが「人間革命」の主題であると述べているのであるから、他人がどうこういうことは出来ない分けである。しかし池田氏並びに読む側の創価学会員の一人一人に聞きたいことは、

「戸田城聖の魂魄」

とは何かということであり、その魂魄の根源はいったい何かということが池田氏の論述には故意にはずされているのではないかとの疑問を持つのである。戸田城聖の魂魄の魂魄は何か？

譬ることさえ恐しいことだが大聖人は、

「日蓮といぬし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈ればをそろしくて・をそろしからず・見ん人いかに・をぢぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし」

との開目抄（全集二二三頁）においてのみ、

「魂魄」

の御言葉を示されているのである。

経王殿御返事における、

「日蓮が魂を墨に染め流して書きて候ぞ」

の「魂」の語もその意味においては、開目抄に示される「魂魄」と同意であることは、本仏の発迹顕本された胸中と、本門の本尊を末法に示し残された胸中が同意であることからも容易に分ることである。凡夫たる戸田城聖氏の心を「魂魄」と表現される感覚は信仰以外のこととしてかたずけられる問題ではない。

「此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし」（前述）の御文から見れば発迹顕本された本地開悟の大慈大悲（一切衆生成仏）をもって久遠元初本因妙の魂を強いて「魂魄」と示されたと理解するのである。

「人間革命」執筆の理由自体も、師匠の魂魄の置き

方も、信仰上はなはだ珍紛漢ではないだろうか。
これ等のことは引き続いて（随筆人間革命三五頁）同書のペンネームの由来にも、
「法悟空。これは私のペンネーム。理由は簡単。仏法では、妙は仏界、法は九界。妙は本源、法は現象。妙は法性（悟り）法は無明（迷い）。その原理からいえば、当然、妙は師、法は弟子となる。私の師は、戸田城聖である。ゆえに弟子の私が、法悟空と命名。軽率であれば、お詫びするまで。ご存知のとおり、単純な私には、深い理由などはない」
もちろんこの考えは池田氏の素直な本音であろう。そして53・6・30で指摘されているように（蓮華の正しい読み方六八頁、特別学習会テキスト四四頁下段）
「学会では戸田会長を本仏と仰ぐように思われますがそうなのですか」
との指摘が発生する原因をこの池田氏の主張は語って余りあるのである。戸田が何故仏界であり、本源であり、法性（悟り）であるのか？　そして創価学会流師弟観並びに代々の会長との関係というものは、
（戸田）（池田）
○妙と法の関係
（戸田）（池田）
○仏界と九界の関係
（戸田）（池田）
○本源と現象との関係
（戸田）（池田）
○法性と無明との関係
と表現して、はたして深い理由などないというのであろうか？　この文中には結として（三六頁）、
「
（妙悟空の意）（法悟空の意）
妙　と　法　師弟の不二に恐れなし
いつぞやの一句である」
と結ばれているが、はたして本師大聖人に照しても恐れなしというのであろうか？　このような、53・6・30の指摘に違背する思考はすみやかに削除し懺悔することを祈るものである。
53・6・30の宗門からの質問の中に（蓮華の正しい読み方一五三頁、特別学習会テキスト三三頁下段）、
「信心修行に関する指導の中で、あえて凡夫の我が身に主師親三徳が備わることを強調する必要はありません。我々は体の仏であり、我々凡夫が仏知見を開いたとしてもその処に主師親が備わるというのは行き過ぎであります」
と示され、その資料としては宮本忠憲論文（大白蓮華47年5月号）並びに大白蓮華41年2月号の講師筆記試

験模範解答の二点のみをあげているが、その根源は彼等の書いた物でなく、池田氏の指導並びに著述がそうであったことはごく当然のことなのである。このことは「人間革命」第二巻二五三頁にほぼ明らかにされているのである。（牧口が48才の時戸田は19才で出逢ったということから、戸田が48才の時池田も19才であったという現実をねじ曲げたこじつけ欺瞞はこの際置くとして）

「戸田は十九歳の春――北海道から上京した頃のことを、しきりと思い出していた。

牧口常三郎と、初めて会ったのは、その年の八月のことである。その日から、彼の今日迄の運命というものが大きく、新しく滑り出したことを、珍しく思いめぐらしていた。

――その時、戸田城聖は十九歳で、牧口常三郎は四十八歳であった。

いま、戸田は、その四十八歳になっている。そして、今夜の山本伸一は、十九歳だといった。彼は、十九歳より、牧口に師事し、牧口を護りきって戦い続けて来たのである。

時代は移り変った。

もし、上京早々、一切が順調であったなら、即ち就職も、勉学の手段も、難なく進んでしまったとしたら、牧口に会うこともなく終ったはずである。

彼にとって、牧口常三郎という生涯の師に会わなかったとしたら、戸田城聖の生涯も運命も、全く別の行路を歩み終ったことであろう。してみると、彼のこの苦闘は牧口常三郎の前に、辿りつくための苦闘であったに違いない」

と本尊抜きで、牧口常三郎に辿りつくことを最大事とし、又同二巻二六二頁には、

「日記（注＝戸田の）の中に『信仰の力に生きん云云』とあるが、未だ特定の信仰があったわけではない。彼は苦闘のなかにあって師と主を求め抜いていたのである」

このことを伏線にして同巻二六九頁には、

「――この時牧口は四十八歳であった。

戸田はこの日、牧口校長という信頼すべき「主」に会えたことを、いままで誰人に会った時よりも、心で嬉しく感じて帰った。やがて彼は、西町小学校の訓導に採用されたのである。

そして牧口と仕事の苦楽を共にした時、この「主」は実は自分の終生の「師」であることを悟ったのである。

厳しい「師」であった。生涯ほめられたことは一度もなかった。しかし年齢的にいっても、またやさしい「親」ともなった。

詮ずるところ、戸田は、いつか牧口という一人の不出世の教育者に「主」「師」「親」を見出し、終生、献身をもって、純真に仕えたのである。――

彼は牧口に対して「弟子の道」を貫いた。この宿縁の深さを、仏法では「師弟不二」として説いている。

その後、牧口と戸田が日蓮正宗に入信したのは、昭和三年のことであった。

入信前の二人は「師弟不二」という言葉は、もとより知らなかったが、その心の奥底では鮮かに知っていた。

いま――戸田はこの「師」を失って四年近くになっていた。

そして、ひとり残された彼にとっては、「師」の遺業を継いで、孤軍奮闘してきた四年間である。

今の戸田は、牧口に彼が仕えたように彼の真実の腹心として仕える弟子の出現を、心待ちに待っていたのであろうか。――

このように、あえて凡夫の我が身に主師親の三徳が備わることを強調してはならないにもかかわらず、仏法における「師弟不二」と凡夫同士の師弟関係、並びに未入信の心の奥底で何を鮮かに知ることが出来たのか、この混同は完全に大聖人不在の「師弟」を証明立てるに余りあるものである。はては、

「彼の真実の腹心として仕える弟子の出現」

とあって、我々が本来あるべき本仏大聖人の弟子たる心得はなくても「師弟不二」といえるのであろうか？

宮本忠憲氏の論文（特別学習会テキスト三三頁下段）

「主師親の三徳は仏が備えている根本的資格であって、我々の九界の凡夫にはそうした徳はないとするのは大きな誤りである。なぜなら、九界の衆生も一念三千の当体であり、仏知見を具えているからである。その仏知見を開き示し悟らしめ入らしめるのが仏の使命である。我々にとって仏知見を開く鍵は何かといえば〝信〟に尽きる。以信代慧の原理によって、御本尊に対する尊敬すなわち信心によって仏智を開き顕わすことができるのである。そこには主徳も師徳も親徳も一切含まれている」（大白蓮華47年5月号）

との、一体三徳兼備論？と、

「主徳――眷属を守る力。

現在でいえば、社会それ自体。しかし民衆の犠牲のうえで成り立っている主徳を失った社会であり、その民衆は不幸です。

真に人々を根底から幸福にするには、妙法を根底とした社会以外にない。全日本を、そして、世界を守る池田先生のみ、現在において主徳をそなえていらっしゃる。

師徳――眷属を指導する力。

師とは、知識を教えるのみでなく、智慧を開かせてあげるものでなければならない。現代の教育は、知識に終始した師徳なき姿である。

以信代慧の妙法によらねば、真実の師徳はありえない。私たちの師匠池田先生のみ師徳具備でいらっしゃる。

親徳――眷属を慈愛する力。

親の愛は、相対的であり、子の発展をさまたげる場合がある。

身命を惜まず、われわれ学会員のしあわせを願ってくださる池田先生こそ、親徳具備でいらっしゃる。

（「講師筆記試験模範答案」大白蓮華41年2月号）

この二点の論調も池田氏の論調を日頃の薫陶から受けて書いたものであり、池田氏のものにくらべればまだまだかわいい「弟子」の過ちで済む。

「主」「師」「親」になったりなられたりの牧口・戸田・池田の相関関係は、本来、「牧口・戸田の師であり弟子であると思いこんでいた二人は共々に本仏大聖人のもとに弟子であることにただただ茫然とし改めて感謝を申し上げた」――ぐらいのことが示されてしかるべきではないだろうか。

又、池田氏自身においても、この「主・師・親」を（随筆人間革命五九頁）、

「（自分達）夫妻にとっては、主人であり、師匠であり、親でもある……生涯にわたる、人生の師であるからだ。ある人は、自分がいちばん可愛がられたというであろう。それはそれでよい。しかし、私は私である。――先生との間に、距離と媒介ともいうべきものは存在しなかった。仏法に説く師弟の道を貫いたと自負している。

一点の悔いもない」

と自ら率先してまちがった教義認識に終始しているのである。なぜこの曲解を基に、

「仏法に説く師弟の道を貫いたと自負している」のであろうか？　この混同はおそろしく不思議である。これ等の考え方は根本から改め、速やかに削除すべき

である。

さて、自らの正当性をうたい（人間革命二巻二七二頁）、

「大聖人の慈悲は、実に逆縁によって、まず日本の広宣流布成就の悲願を、戸田城聖ひとりに、自覚せしめたのである。彼の自覚は、牧口の真の弟子であったこと、そして師弟ともに、敢然と難に赴いたことに、胚胎していたといえよう。

いま牧口の遺業を彼の分かつ一人の青年が、四十八歳の彼の前に出現したのである。仏法が真実であるならば、人類史上、未曽有の宗教革命を断行する人と人との間に、必ず師弟の宿縁が実現する筈である。

――あの青年（池田）はまだ何も知らない。いまはそれでよいのだ」

このことも我が身が先行した師弟不二論であり我が身の正当化立証の為の師弟不二論である。実におそろしいことである。

人間革命二巻（二八七頁）には、

「誤れる宗教は教祖だけが悟りを得たようによそおい、他の信者はいつまでも、無知暗愚として取り扱われているのが常である。信者は教祖の奴隷に似ている。

正法は真実の師弟不二を説き、師と共に進み、且師以上に成長し、社会に貢献していくことを指導する。前者は、不合理であり、俗にいう宗教のための宗教、そして企業化した宗教である。後者は生きるための源泉であり、生活法である。矛盾のない哲学が裏付けとなっている」

このような不思議な師弟不二を定義付けているのである。

そして、いったいぜんたい、

「矛盾のない哲学が裏付けになっている」

と示される「哲学」が大聖人の仏法をさしているのであるならば、我々が境智冥合し成仏を願う、「久遠元初・本因妙」の本法は信じ仰ぐものでなく、我が身の為の裏付けや証明する為の手段でしかないのだろうか。裏付け感覚の中に真の師弟不二が論じられる裏付けを明確に返答してもらいたいものである。

随筆人間革命（八一頁）には、

「（戸田は）疲れのでた晩年、側にいた私どもには『先生がいないと寂しい。牧口先生のもとに還りたい』と、よくいわれたりしていた。

私は、そのたびに電流に打たれる思いであった。

仏法に結ぶ師弟というものが、かくも崇高にして尊く、偉大で強靱なる永遠の絆をもって連結されているものなのか、と。まさしく、生死は不二であり、師弟は不二であることを、色読するのみである」

と認識されるにあたっては池田氏の信仰感覚を疑うばかりであり、仏法上の「師弟」をこのように考え指導し、「現代に展開させていただいた」と、いっていたかと思うと鳥肌のたつ思いである。

この随筆人間革命（八一頁）の論述は、「人間革命」（一巻九頁）にも同様の論調で、

「生死の二法は一心の妙用なり――と。牧口会長も戸田城聖も、ともに広宣流布、王仏冥合の心には何等かわりはなかった。

師弟不二、生死不二なればこそ、宗教革命の血は脈々と受けつがれていた」

と「生死一大事血脈抄」（全集一三三六頁）に引用される伝教大師の言葉、

「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳」

をかかげ、生死血脈の基は唯南無妙法蓮華経也、との根本義を凡夫として正しくわきまえ拝することは良いとしても、牧口・戸田との関係がそのものであるという論調は、何をもっていうのか？　再三いうように、本仏大聖人の前に等しく弟子であるべきはずの我々や貴殿方の立場・姿勢は、池田氏の論法をもって根本からズレてしまっていると断ぜざるを得ないのである。

まして（人間革命三巻一五九頁）、

「ああ甚深無量なる法華経の玄理に遭いし、身の福運。

戸田先生こそ人類の師ならん。

祖国を憂え、人類に必ずや最高の幸福を与えんと、邁進なされ行く大信念。そして正義の、何ものをも焼くが如き情熱。

唯々、全衆生を成仏せしめんと、苦難と戦い、大悪世に大曙光を点じられた、日蓮大聖人の大慈悲に感涙す」

と示し、

「法華経の玄理に遭いし、身の福運」

と、

「戸田先生こそ人類の師ならん」

とをまったく混同し同意語のごとく用いているのである。そしてその後には、

「日蓮大聖人の大慈悲に感涙す」

と関係付けることは、どのように解釈すべきなのか？

一般的国語を理解する人々であるならば、

「戸田先生こそ人類の師ならん」

とは、そのままに読み、理解するであろう。これがミスプリントでないとしたら、前後にある文章はどのような意味であり、大聖人はいかなる師なのか？全ての信仰者に明らかにこの点を削除し訂正すべきである。53・6・30の文中には（蓮華の正しい読み方一三三頁、特別学習会テキスト三一頁上段）、

「御義口伝における人と法は釈尊と法華経であるが、本宗では人とは文底本因妙の釈尊、法とは、御本尊であります。しかるに学会では帰命するとは、人とは戸田会長であり、また池田会長であるというのは、まさに戸田・池田会長が人の仏となります。戸田・池田会長に南無し皆に拝ませるというのですか」

と質問され、加えて（蓮華の正しい読み方一三三頁、特別学習会テキスト三四頁下段）、

「妙法への帰命は当然でありますが戸田前会長にたいし帰命の語を使うことは行き過ぎであります。帰命するのは南無妙法蓮華経の御本尊の人法にであって、いかに自己の師であるとしても帰命というべきではありません。従ってそれは日蓮正宗を逸脱するものであります」

等々質問され、その資料として特別学習会テキストには（三〇頁下段）、

「一、まさしく現代における〝人〟への帰命とは師匠への帰命であり、池田会長への帰命となる。また、池田会長が大聖人の御書を寸分違わず、身に移し実践されていることから考えても、必然的にそうなるのである。（村野宏論文『ひのくに』10号）

一、戸田先生のとらえ方が〝稀有の師〟なのです。〝稀有の師〟という言葉が初めて出てきたのです。『稀有の師への帰命』ということを、御義口伝をひっぱり出して読んだのです。いずれにしても、これはついていくというようなものではない。師弟不二だから、生命次元の問題だと。（福島源次郎談『潮流』第九号）」

又、（特別学習会テキスト三四頁下段）

「今、我々が『人間革命』を学ぶ意義も、この一点にあるといえよう。師が身をもって実践した真実の軌跡をとどめたこの一書に、我々の行動の原理を求め、そこに学んだ精神を自身の原点として実践に移す、その往復作業の中に妙法への帰命、即具体的実践としての〝師への帰命〟の展開があり、自身の人間革命もまた一歩一歩進められるのである。

（福島源次郎論文、大白蓮華50年5月号）」

この三点を信仰の逸脱、主張の誤りとして出典されているのである。しかし右にあげた福島源次郎談の、

「”稀有の師“という言葉が初めて出て来たのです」

とか、

「具体的実践としての”師への帰命“の展開があり」

とは、何に「出て来た」のか、何の書物に「展開」されたのかを考えなければならないはずである。それは

「人間革命」三巻一八二頁に明確に、

「この若い革命家の『妙法への帰命』という理念は、具体的な実践でいうならば、稀有の師への帰命、すなわち『戸田城聖への帰命』でなければならぬことを彼は知ったのである」

と、池田氏自身に誤りの根源があることは、明白である。

然るに、この「人間革命」を基として、氏の忠実なる弟子、村野、福島両氏が書かれた論文に対しては、

「一、なお『ひのくに』については『会長が久遠の師』とか『会長のふる舞いが法でありそれに帰命する』『大聖人の御書を寸分たがわず身に移し、実践されている』等の趣旨のかなりの逸脱の部分があったので、すでに廃刊処分にしました」

（蓮華の正しい読み方一三四頁、特別学習会テキスト三一頁下段）

として、池田氏自身は知らぬ顔の半兵衛を決めこんでいる。

再々述べた如く、彼等の誤りの根源は、愚かな師匠の独断と愚考から出ていたのである。

何故、本家本元の誤り「人間革命」から廃刊処分にしないのであろうか？

やはり「人間革命」は別格であり、今も「現代の御書」として誤りなき書なのであろうか？

末法万年の信仰者のために明確に削除し、廃刊・回収なりをしていただきたい。表現の過ちとしてかたずけることは出来ないのである。

たとえば、故日達上人を師範とあおぎ出家得度をした人間も、昭和五十四年七月二十二日、日達上人が遷化されるや、すべての僧侶の信仰・修行上の師範は、次の正式な猊下へと自動的に移行されるということである。

但し、ここで注意しなくてはならないことに、大聖人の教義と猊下の指南に根本的くい違いがあった時には、どこまでも大聖人、日興上人の指南を根本として万事を見定めるべきところである。

その時の猊下においても、たとえ、先々の猊下の指南であろうと、大聖人の教えにそぐわないものであるならばくじくべきが正道であろう。又弟子檀那においてもその時の猊下の御判断が白が黒に、黒が白に大聖人の法に照らして転倒している時は同様に御理解いただくまで御諫め申しあげ、まちがった主張を排除することが正道である。今日の混乱はその為に起っているのである。このことをして「日興遺誡置文」（全集一六一七頁）には、

「一、富士の立義聊も先師の御弘通に違せざる事。

（中略）

一、時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事。

一、衆議為りと雖も仏法に相違有らば貫首之を摧く可き事」

と示されるのである。

日蓮正宗のこのような師弟の筋目は七〇〇年来ごくあたり前のものとされてきた。よって御信者の立場にあってもその主義を貫くことは当然である。

このように考えてくると、創価学会における〝人生の師〟や〝折伏の師〟という考え方は「師匠」の働きを細分化し表現したものとして、それはそれで結構だが、根本の大聖人という本師を忘れ、その時代その時代におけるその時の師範・猊下を忘れ信仰を独善的に論じ〝折伏の師〟や〝人生の師〟が時によって本仏の立場にとって変るほど重複しているのである。それは「人間革命」全編を通して湧き出している所の欠陥である。

故に（人間革命四巻二四九頁）、

「『先生、今度、三島さんが理事長になると、私の師匠は三島さんになるんでしょうか？』

『いやそれは違う！　苦労ばかりかけてしまう師匠だが君の師匠はぼくだよ』

戸田から明確な言葉がはねかえってきた。この一言を、純粋な青年伸一は、全生命で知りたかったし、答えてもらいたかったのである。彼の全身には、いい知れぬ喜悦がほとばしった。

（中略）

――これでいい。信用組合が潰れようと、戸田が理事長をやめようと、戸田と自分との一線が狂わないならば、何が起きようと、かまったことではない。

（中略）

――ぼくの生涯の師匠は、先生なんだ。先生なんだ。これでいいんだ。これでよし」

この事業の失敗を説明する文章の中で（人間革命四巻二六八頁）、

「古の奇しき縁に仕えしを　人は変れど　われは変らじ」

との一首に結晶したのであると示されているのである。

「人は変れど　われは変らじ」――とは、

○御本尊に対する信仰心のことか？

○戸田に対する忠誠心のことか？

答は戸田に対するものとしかいえないのである。

この歌に対し、戸田は（人間革命四巻二六九頁）、

「幾度か戦さの庭に起てる身の　捨てず持つは　君が太刀ぞよ

（中略）

色は褪せ力は抜けし吾が王者　死すとも残すは　君が冠

（中略）

――この私が、はたして先生の太刀なのであろうか。この私が、先生の冠に値するのであろうか。……先生は御自分のことも、私のなにから何までも、解っていて下さるのだ。

伸一は眉をあげた。戸田の深い慈愛は、この時、伸一の生命を永遠に貫いたのである。異体は同心となり、一つの偉大な生命に溶けて、久遠からの実在の姿を現わしたのである」

ここまで読んでくると、

「久遠からの実在の姿を現わしたのである」

ということは、戸田と大聖人のスリ変えと重複の作業といわれても仕方がない所まできているのである。

「古の奇しき縁に仕えしを　人は変れどわれは変らじ」

と、

「久遠からの実在の姿を現わしたのである」

とは、大聖人の本地を我が身に取り入れ、そのものとなりスリ変えたということになるのである。

このことは53・6・30の中において指摘されている（蓮華の正しい読み方一五三頁、特別学習会テキスト三六頁上段）。

「『学会総体に久遠元初の生命活動を確立し……』とはどういう意味ですか」

としてその論拠の資料には、（特別学習会テキスト三六頁上段）八矢英世論文・文集「教学と私」第一巻の、

「池田先生こそ本門弘通の大導師であります。私達は、かかる稀有の師と会うことのできた福運をかみしめると同時に、必ず師の心にかなう弟子として生涯を貫き、学会総体に久遠元初の生命活動を確立し、

広宣流布達成を決意するものであります」
との文面をあげているが、この八矢英世氏（現壮年部長、師範）にしてもりっぱな師匠？の御薫陶をあおぎ書いただけのことがここに充分わかるのである。そして〝稀有の師〟が戸田・池田とここに完全にダブり、スリ変った形で表現されてきているのである。ならば（特別学習会テキスト三六頁下段）、
「これは明らかな誤りであります」
との答えは、そのまま「人間革命」に如実に示されている（四巻二七一頁）、
「久遠からの実在の姿を現わした云云」
とは「明らかな誤りであります」――となり久遠元初本因妙の源をけがす理論であるから、削除すべきが当然と池田氏自身思うべきである。
又、53・6・30には（蓮華の正しい読み方一三三頁、特別学習会テキスト三六頁下段）、
「池田会長と境智冥合というなら、池田会長は仏ということになりますが、そうなのですか？」
と質問をされ、やはり資料に幹部である平塚一雄述・文集「教学と私」第一巻の文をあげ、
「昭和三十八年頃の夏季講習会で、八矢教授（現壮年部長、師範）より『生死一大事血脈抄』の講義を受けたとき、『生涯、池田先生と生死一大事血脈抄でいこう。池田先生と境智冥合できる人材になろう』と強く訴えられたことは、強く私の脳裏に焼きついて忘れられない」（特別学習会テキスト三六頁下段）
との八矢氏・平塚氏の意識や表現を悪の見本にしているが、これとても「人間革命」四巻（三〇五頁～三〇七頁）には、恵まれない池田氏に対して戸田の個人教授（語学を除いて、政治、経済、法律、漢文、化学、物理学と百般にわたるという）が日曜ごとにはじめられ、その所に（人間革命四巻三〇七頁）、
「あすにでも自分が死んでゆくから、そのためにいま全力を尽くして教えているのだ、といった遺言の講義にも見えた。まさに境智の冥合する姿を現出したといえよう。――」
このように迄表現されているのである。何故あってはならない悪例のトップとして資料に加え削除されないのであろうか？　53・6・30を遵守することが責任として課せられているならば、今からでも遅くはない、削除することを願うのみである。
創価学会においては、昔から大聖人の「大難四ケ度」にあわせて、
「本当の法華経の行者には必ず四回の難が到来する

ものである」

という指導が口コミでされてきた。そして、そのことをあたかも証明し、帳尻をあわせるごとく、「人間革命」四巻（二九四頁）には、牧口の七回忌にあたるあいさつをもって、

「想い返せば三十年前、数え年で二十一才、先生五十才の御年の時、先生にお目にかかりました。それ以来、先生とは、師弟とも、親子とも、主従ともつかぬ仲でした。

また、四回の先生のご難にお供いたしました。――第一回は西町小学校より左遷の時、第二回は三笠小学校より左遷の時、第三回は芝の白金小学校より、校長として退職を余儀なくせられた時であります。第四回目は昭和十八年、軍部の圧力により、法のため巣鴨拘置所に御供した時であります」

このように示されているのだが、牧口・戸田の入信は先に示したように「人間革命」二巻（二六九頁）に昭和三年と示されている。つまり信仰をきっかけに結ばれたものではなく第一第二の左遷問題は未入信の時の事柄なのである。そして第三回目の芝の白金小学校の時はたしかに両者共信仰に入られた後のことであろうが教育畑におきた派閥問題であり、信仰者ゆえの〝御難〟等とされるものでは断じてないのである。何故これ迄にして語呂合せが好きなのか計りかねるのであるが、それは戸田城聖著『人間革命』（戸田城聖全集四巻四二五頁）に明らかである。

「『去年、一年間待てと先生が区会議員の藤原にいったのでしょう。

その時、藤原はきかないで此の方の力で一年引っぱったのだから、校長の位置をやめる事は、先生ないじゃありませんか。この学説を完成するまで教育局と闘争しようではありませんか。田中正三先生と台町の山本さんに私がもう一度相談して見ましょう。

一体どうして彼等はそんなにしつこいのですか』

『課長の広田が自分の子分を校長に出そうとして、最も後継者のないと思われる校長三人を選んだのさ。その中に私が居ったというだけなのさ。主義も教育もあったものではない。只親分子分の関係だけで人事をやっているのさ』」

このように派閥人事に牧口がまきこまれて左遷される憂き目にあったということであり、信仰は何んらからんでいないのである。これらが信仰のために受けた難といえるのであろうか？もし池田著の「人間革命」に示されるように、戸田が再々にわたって、そのよう

に表現していたとするならば実に不思議な信心理解であり、自己正当化の為の大聖人利用と、いえるのである。絶対に改めるべき点である。

このように自己正当化の為の理論は「人間革命」の全編に流れているものである。それはこじつけとスリ変えが渾然一体となって巧妙に定着させてしまうしたたかさがあるのである。これらが伝統の「現代に解釈（展開）」といわれる実体なのである。

「人間革命」四巻（三〇〇頁）には、

「山本伸一を支えていたものは、この世で出会った戸田の特別の薫陶と、日蓮大聖人の仏法だけしかなかった。彼は、それをギリギリのところで、繰り返し思った。

——仏法真実ならば、因果の理法これまた厳しくあらねばならぬ。十年後の学会を、見よ。二十年後の学会を、見よ。そして我が存在も！」

このように、戸田と大聖人との同列化の中で戸田の方を優位に考え、

○仏法真実ならば——学会の存在を見よ。——と展開させ、

○そして我が存在も　と我慢偏執のとどめをさす。

このような論調は本当に池田氏のいいたいことを素直にそのまま表現したことと思えるのである。そしてここにも、やはり大聖人を根本にした本当の「師弟不二」は微塵も介在しないのである。さもあらん（人間革命十巻五六頁）、

「彼の弟子たちは、師弟の道は心得ていたが、広布実践のうえの師弟不二のなんたるかを悟るものはほとんど皆無といってよかった。不二とは合一ということである。

昭和三十一年の戦いに直面したとき、彼の弟子たちは戸田の指導を仰いだが、彼らの意図する世俗的な闘争方針を心に持しながら、戸田の根本方針を原理として聞き、結局、彼らの方針の参考としてしか理解しなかった。戸田の指針と彼らの方針とは、厳密にいって不同であったのである。師弟の道を歩むのはやさしく、師弟不二の道を貫くことの困難さがここにある。

ただかろうじて、山本伸一だけが違っていた。彼は関西方面の最高責任者となったとき、戸田の膝下にあっての久しく厳しい薫陶から、戸田に言われるまでもなく、ひとり多くの辛労に堪えながら、彼は作戦を立てた。

その彼の作戦の根本は、戸田の指針とまったく同一

であった。不二であった。彼には戸田の指導を理解しようなどという努力は、すでに不必要であった。以来、戸田の時々刻々の指導の片言隻句は、彼の闘争方針の実践にますます確信を与え、いよいよ渾身の力量を発揮する縁となったのである。

彼は一念において、すでに戸田の一念と合一したところから出発していた。

ともあれ大聖人の仏法が師弟不二の仏法であるならば、一切法がこれ仏法であるがゆえに、広布実践という現実的な昇華のなかにも、師弟不二の道が貫かれていくことは当然の理といわなければならない」

このように池田氏の「師弟不二」は凡夫眼前の「師弟不二」であって彼をしていわしめている久遠元初とは、戸田の胸中をさしていっているのである。

「ともあれ大聖人の仏法が師弟不二の仏法であるならば、――」

と、ここでも我見を正当化せしめる為の仏法利用は労をいとわず平気でされているのである。この文章のあとすぐに（人間革命十巻五七頁）、

「後の話になるが、戸田が深く尊敬申し上げていた堀米日淳上人の御説法が思い出される。

『戸田先生は師弟の道に徹底されておられたがゆえに、あの深い仏の道を獲得されたのである。……創価学会は何がその信仰の基盤をなすかといいますと、師匠と弟子という関係である。この関係に徹すれば、仏法を得ることは間違いない。戸田先生ほど初代牧口先生のことを考えられた方はない。親にもまして初代会長に従ってこられた。……この初代会長、二代会長を経て、皆さま方の信仰のあり方、また今後の進み方の一切ができあがっている』

まさしく創価学会の実践的生命もまた、師弟不二である。師弟不二の道は、一念における荘厳な不二にあるといわなければならない」

このように堀米日淳上人の御話を引用して、文末には、

「実践的生命もまた、師弟不二である」

とか、

「師弟不二の道は一念における荘厳な不二にあるといわなければならない」

とか、何がいいたいのかまったく不思議な表現であり、単なる文章の出来、不出来でなく独善の自己陶酔をこのような点に見るのである。

さてここに、池田氏が引用した日淳上人の御言葉は、別に「説法」ではない。

これは創価学会九州第二回総会の「御講演」である。この「御講演」は日淳上人全集（三六一頁）に示されているので、その相違点を中略なく引用し、日淳上人は何をいわれんとしたかを、見つめていただきたいのである。

「戸田先生はどうかと申しますと、私の見まする所では、師弟の道に徹底されておられ、師匠と弟子ということの関係が、戸田先生の人生観の規範をなしており、この所を徹底されて、あの深い仏の道を獲得されたのでございます。私はそういうふうに感じております。

これは何かといいますれば、法華経に三つの大綱があって、教えが説かれております。第一、第二はさておきまして、第三の教えの要はどこにあるかというと、師匠と弟子という関係において仏の道が説かれておるのでございます。これをひと口に申しますと師弟の「遠近不遠近」ということでございます。これが法華経の後半本門における教えの大綱になっております。ですから法華経本門の段におきましては師匠と弟子の関係をはっきりと確認致しましてその所から仏の道を得てゆくというのが法華経の要になっております。

宗祖日蓮大聖人様は、この師弟の遠近不遠近、師匠と弟子という関係から、もっと更に深く進まれましてそして種脱相対の教えを立てられ、これが日蓮の法門だとおっしゃってございます。

で、創価学会が何がその信仰の基盤をなすかといいますと、この師匠と弟子という関係において、この関係をはっきり確認し、そこから信仰を掘下げてゆく、これが一番肝心なことだと思う。今日の創価学会の強い信仰は一切そこから出てくる。

戸田先生が教えられたことはこれが要であろうと思っております。

師を信じ、弟子を導く、この関係、これに徹すれば、ここに仏法を得ることは間違いないのであります。だから法華経神力品において『是の人仏道に於て決定して疑いあることなし』と説かれております。この決定して疑いあることなしとは、師弟の道に徹底して、そこから仏法をみてくる時に始めてその境涯に到達するんだとこれが法華の段取りになっております。それを身をもって実行されましたのが戸田会長先生でございます。

戸田会長ほど初代会長牧口先生のことを考えられたお方はないと思います。親にもまして初代会長に随

って来られました。これがきょう皆様方が戸田会長先生によって信仰の眼を開けて頂いたんだと、この師に対する弟子の道を深く考えられましてまいります時に、仏法に、しっかり決定することが出来るのでございます。

この初代会長、二代会長を経まして、皆様方の信仰の在り方、また今後の進み方の一切が出来上がっているわけです」

この講演は戸田城聖が亡くなって後、会長空席の折に行なわれた講演である。

この講演の文章の横に棒線を引いた所のみが、先に示した「人間革命」十巻（五七頁）の日淳上人の御説法ということになるのである。

「尊敬申し上げていた、日淳上人の御言葉」を我田引水に使用するこの引用態度は、いったいなんであろうか。尊敬どころか侮辱ではないか。また日淳上人はこの「講演」の中で、大聖人の「第三法門」への導きである、

「法華経と爾前と引き向えて勝劣・浅深を判ずるに当分・跨節の事に三つの様有り、日蓮が法門は第三の法門なり、世間に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台・妙楽・伝教も粗之を示せども未だ事了えず所詮末法の今に譲り与えしなり、五五百歳は是なり」（常忍抄、全集九八一頁）

との、天台が示した、

○根性の融不融
○化導の始終不始終
○師弟の遠近不遠近

の三種の教相を、天台は法華玄義によって明らかにしたのであるが、大聖人は、

○根性の融不融
○化導の始終不始終

は爾前と法華経の勝劣を判じていることであり二点は同様のことであると断じ、第一法門と決め（権実相対）、

○師弟の遠近不遠近

は師弟子の関係が、久遠からか今だけかによる爾前迹門と本門の間柄の範疇として、第二法門と決め（本迹相対）、その次に第三法門の種脱相対を大聖人は立てるのである。観心本尊抄には、第三法門を（全集二四九頁）、

「又本門に於いて序正流通有り過去大通仏の法華経より乃至現在の華厳経乃至迹門十四品の涅槃経等の一代五十余年の諸経・十方三世諸仏の微塵の経経は

皆寿量の序分なり一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名く、其の機を論ずれば徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獣に同ずるなり、爾前迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日経等の諸小乗経をや何に況や、華厳・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば前三教を出でず奪って之を云えば蔵通に同ず、設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還って灰断に同じ化の始終無しとは是なり、（中略）

本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と為す所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至って等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通倶に末法の始を以て詮と為す、在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」

と示し、第三法門（種脱相対）のたてかたを示されているのである。

三種の教相における「師弟の遠近不遠近」とは、爾前の諸経においては、釈尊は随他意（自分の意志でなく他の人間の誤りや質問に応じて）の説法によって、その場かぎりの師弟関係であり、その本地（源）は明らかにされていないため、遠いとか近いとかが不明の「不遠近」であり、法華経の寿量品にきたって、

「我実成仏已来無量無辺百千万億那由佗劫」

として久遠実成の源を知らせ、弟子達にも、

「我常在此娑婆世界説法教化」

とされ遠い源の師弟関係を示すわけである。この寿量品における「師弟の遠近不遠近」という宿縁深厚の関係を、釈迦・多宝の宝塔の会座、そして地涌の菩薩の上首である上行菩薩の出現との関係から、大聖人は、

「日蓮が法門は第三の法門なり」

と、脱益・応仏昇進・色相荘厳の仏を破して、下種益・名字凡夫の法を文底に建立されるのである。

この所を日淳上人は「講演」の中で、

「法華経の要」

と表現し、

「この師弟の遠近不遠近と弟子という関係から、もっと更に深く進まれましてそうして種脱相対の教えを立てられ、これが日蓮が法門だとおっしゃってございます」

このように大聖人の信仰のあり方を大前提にしなければならないということを示されているのである。それであるからして、その次には、

「で、創価学会が何がその信仰の基盤をなすかといいますと、この師匠と弟子という関係において、この関係をはっきり確認し、そこから信仰を掘下げてゆく、これが一番肝心なことだと思う。今日の創価学会の強い信仰は一切そこから出てくる。戸田先生が教えられたことはこれが要であろうと思っております」

と続け、

「だから法華経神力品において『是の人仏道に於て決定して疑いあることなし』と説かれております」

とくれば、日淳上人は大聖人の示された本仏への「師弟不二」を誓い、そこからはじめて創価学会における師弟関係が出発するのである、と示され、又さとされているにすぎないのである。

「戸田先生が教えられたことは、これが要であろうと思っております」

との日淳上人の言葉によって考えるならば、池田氏のいう、

「一念における荘厳の不二」

とは、大聖人を忘れた、

「悲惨な不二」

だといわなければならないのである。読者にはもう一度「人間革命」における引用のあり方と、日淳上人の「講演」を読みくらべ池田氏の信仰姿勢を考えていただければ、明らかに謗法とわかるのである。

たまたま「人間革命」十巻（一〇二頁）から、これが創価学会のいう「師弟不二」の論法上最たるものであろうと思われるものがある。この「人間革命」に展開する場面は、十巻目における中心である、昭和三十一年七月の参議院議員選挙の場面である。

「戸田城聖の永年手塩にかけた弟子たちが、全国に散って活動したわけだが、広布実践における師弟の関係を単なる師弟の道ととるか、師弟不二の道ととるかが、はじめてあらわにされたと見なければならない。師の意図するところが、現実にあらわれるか、あらわれないかは、弟子の実践の姿を見れば容易に判断のつくことである。師の意図が脈動となって弟子の五体をめぐり、それが自発能動の実践の姿をとるとき、師弟の連結は、はじめて師弟不二の道をまっとうすることが辛うじてできるといわなければならない。師弟に通ずる生命の脈動こそ、不二たらしめる原動力である。そのためには、師の意図の脈動が何を根源としているか深く理解し、みずからの血管のなかで消化する強信にして困難な信仰作業を必

要とする。その本源の師弟の力は、いうまでもなく御本尊につきる。

たとえば山本伸一が大阪闘争に先立って、数か月にわたる一念に課した億劫の辛労は、この困難さを避けることなく乗り越える作業であった。そして、師弟一体の実践の姿をあらわしたのである。

多くの弟子たちは、この困難さを避ける。

師の意図に叛く考えはさらさらないものの、師の意図をただ教条的にしか理解しない。そこで厳しい現実に直面すると、周章狼狽して師の意図を生のまま機械的に同志に押し付けて事足れりとするか、あるいは師の意図が気になりつつも、直面した現実を特殊な場合として、浅薄な世間智をはたらかせて現実に適合しようと焦る。ここにいたって、師弟の脈動が断たれていることに気がつかない。まことに師の考えるところと、弟子が懸命に考えることが冥合するとき、信仰の血脈は偉大な脈動となって迸る。師の意図に教条的にただ追従することは、弟子にとってきわめて容易なことだ。師の意図からその根源にまで迫って、その同じ根源を師とともに頒かちあう弟子の一念は、まことに稀だといわなければならない。しかし、この稀なる一念の獲得にこそ、微にして妙なる師弟不二の道の一切がかかっているのである。

日蓮大聖人に常随給仕の誠をつくした日興上人が、六老僧のなかにあって唯一人、師弟不二の道をまっとうすることができたのも、この困難な師弟の道に徹したからである。ここに五老僧の単なる師弟の道が師に敵対するにいたってしまった事実と、日興上人の師弟不二の道が大聖人の仏法の血脈をよく厳護し得た唯一の理由がある。そして大聖人没後、今日に至るまでの七百年の長い歴史が、すべてを語って余りあることに誰でも気づくであろう。

次元は異なるが、広布実践のうえで戸田城聖と山本伸一における師弟という不二の道も、また今日の創価学会形成発展の原動脈であったことは、今にして思えば一点の疑いもなきところである。ただ昭和三十一年当時、草創期の激流のなかにあっては、この原動脈は人目につかぬ底流に潜んでいるしかなかったが、大阪の激闘の成功は、ときにこの師弟不二の道の実践がいかなるものであるかを、ほのかにあらわしていたといってよい」

このようにして文中に示される、

「師の意図の脈動が何を根源としているかを深く理

解し、みずからの血管のなかで消化する強信にして困難な信仰作業を必要とする。

その本源の師弟の力は、いうまでもなく御本尊につきる」

このように表現されていることは、一見、大聖人・御本尊を中心としているかのように見えるのだが大聖人を師と拝していることはないのである。つまり戸田と池田が師弟不二するためには御本尊に対する信心がなくては師弟不二出来ないのである。――という論法である。つまり御本尊に対する信仰は師と弟子の接着剤でしかないのである。それは何故かといえば、

「まことに師の考えるところと、弟子が懸命に考えることが冥合するとき」

との「師弟冥合」?なる考えは戸田・池田の関係を一体不二と考えさせ、まことの「師弟不二」とはこれなのだと感じさせる論法にほかならないのである。

「同じ根源を師とともに頒かちあう弟子の一念はまことに稀だといわなければならない。しかし、この稀なる一念の獲得こそ、微にして妙なる師弟不二の道が一切かかっているのである」

この所において何故根源である大聖人を根本の正師とし、教導の師と弟子共々に大聖人の弟子であることを自覚せよ！と何故まともに考えられないのであろう。

「三世常恒、根本の正師は大聖人でしかないんだ」ということを単純に信仰の上から教えてくれる人間だけを教導の師といえるのではなかろうか。この点からいうと池田氏の、

「根源を師とともに頒かちあう」

とはどういう信仰心なのか不思議でならない。そしてもし、

「根源」

との表現が「久遠元初本因妙」の法でなく、戸田の胸中を意味しているとするならば、まさしくこれは狂人である。

「人間革命」の全ての展開がそうであるようにこの論調も、とどめは自らのことにさされているのである。

「次元は異なるが、広布実践のうえで戸田城聖と山本伸一における師弟という不二の道も、また今日の創価学会形成発展の原動脈であったことは、今にして思えば一点の疑いもなきところである。

ただ昭和三十一年当時、草創期の激流のなかにあっては、この原動脈は人目につかぬ底流に潜んでいるしかなかったが、大阪の激闘の成功は、ときにこの師弟不二の道の実践がいかなるものであるかを、ほ

のかにあらわしていたといってよい」

と、しめくくられているのである。大聖人の仏法に対する日興上人の師弟不二を前例に引いて、

「次元は異なるが」

と示しているが、「師弟不二・師弟相対」とは幾種類もの「師弟関係」というものがあるのであろうか？根本の正師と手続の師匠との幹と枝葉との違いや立て分けの違いはあれ、次元が異なる「師弟不二」などこの世にあり得ないのである。

いくら次元が異なるとはいえ、大聖人・日興上人の関係を前例に示せば、読者は戸田・池田の関係をどう見るであろうか？そしてこの場面の展開は「選挙」であるということに、

「選挙は信心である」

との改めざる姿勢を巧妙にこの場面において見せつけられるのである。

このように「随筆人間革命」、妙悟空著『人間革命』を引き乍ら「人間革命」を一巻から順に「師弟観」におけるまちがっている認識と53・6・30を遵守していない点等をあげてここに示してきた。その上でいえることは、「主・師・親」を牧口・戸田に置きかえたことによって池田氏も「主・師・親」を得られる立場になったこと、そして「師」自体の誤った認識は、大聖人の信仰を心懸ける人間の常識以前の誤りであり、根源の本仏大聖人の存在を無視している文章の表現は故意にこの「人間革命」の主張であるということが明確にわかったということである。

―――――◇―――――

☆本来「主師親の三徳」とは、一般世間における主人・親・師匠とは同じ言葉を使えども意味する内容は違うのである。つまり、

○主徳――一切衆生を守護する力と働き

○師徳――一切衆生を導き教化する力と働き

○親徳――一切衆生を慈しみ愛する力と働き

という一切衆生を対象にしてその「徳」という要素を示しているのである。つまり、

徳とは――正しい宇宙森羅万象の道理・運行を悟り、それを振舞いとして行為に示す心の作用

ということである。故に一般世間に約して見てもこの「主師親」に対する恩徳は重いものであると考えなくてはならないのである。開目抄の最初には（全集一八六頁）、

「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、いわゆる主

師親これなり」

といわれることは、ごくあたり前の常識の中に仏法が生きていることの証明でもあるわけである。

たとえば私が孤児であったとする。幼児の頃人にもらわれその人の子供と変らないほど大切に育ててもらったとする。そうするとここで「親」ということになる。そして高校まで出させてくれて、（たとえば）家業のクリーニングの仕事を教えてくれながら従業員として育ての親といっしょに働くとする。そうすると、「親」は「主人」であり「師匠」だということになるわけである。このように一人の人間が三つ兼備するということは、一家の主人であっても子供に対してすべからくそうだということがいえるわけである。

それではその家の「主人」を一家揃って手を合せ拝しているかというと、そんな家はないのである。つまり仏法で説く所の「主師親」と一般社会における「主師親」とはまったく違う次元の事柄なのである。最初に示したように仏法における「主師親」は、一切衆生に対して「主師親」の働きがなければ「主師親」といえないのである。経文に、

「悉是吾子」

と示されることはこのことである。

開目抄を順次読む時、色々な種類の「主師親」があることを判別出来る。まず外道の主師親を破し、内道の主師親を破し、権経の主師親を破し、法華経本迹の文上の釈尊（主師親）を説き、次にまことの（文底本因妙）主師親を明かし、文上の釈尊（主師親）を破折しているのである。この中において、我々が一般世間において考える主師親とは、外道の主師親を破折する段に、

「此等の賢聖の人々は聖人なりといえども過去を・しらざること凡夫の背を見ず・未来をかんがみざること盲人の前をみざるがごとし、但現に家を治め孝をいたし堅く五常を行ずれば傍輩（ほうばい）も・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ或は位をゆづり天も来て守りつかう（中略）而りといえども過去未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なりまことの賢聖にあらず云云」

と示し、我々が考えるような賢い人、すばらしい人が主師親の働きをもっているとはいっても、その人は自分で自分の背中が見えないように、身近な過去も見えないし、未来のことも盲人のように見ることが出来ない。そして、ただただ現在だけは人に負けないよう家

を治め、孝行の心を持ち、人間の道である仁義礼智信の行いをして行く所に、友は慕い、尊敬し、国中に名声はひろがり、国王は家来にかかえてくれるし、もっと重く国王自身にものを教える師匠になるか、次の即位を自分が受けるようになる等して、増々名声を博するのである。しかし正しい法にのっとり過去・現在・未来を知ることが出来ないのであるならば、父母・主君・師匠に真の報恩をすることも出来ず、かえって不知恩の者となり賢人とはいえないのである（自分自身をも主師親の徳をもつ人間とはいえない）、――と示されているのである。

つまり「主師親の三徳」とは、過去現在未来を通じて我々の生命を受けとめ導くことの出来る「主師親の徳」を持った者でなければ主師親ではないということであり、加えて一切衆生・森羅万象に対応する「主師親の徳」でなければ話にならんということである。

つまり法華経譬喩品に（開結二三三頁）、

「今此の三界は皆是れ我が有なり
其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり
而も今此の処は諸の患難多し
唯我一人のみ能く救護を為す」

と説かれ、寿量品には（開結五〇八頁）、

「我が此の土は安穏にして天人常に充満せり」

と、仏の示すべき国土を寂光・浄土として示しているのである。大聖人はこれ等の経文をふまえて「御義口伝」に（全集七五七頁）、

「仏に約すとは迹門の仏の三徳は今此三界の文是なり、本門の仏の主師親の三徳は主の徳は我此土安穏の文なり、師の徳は常説法教化の文なり、親の徳は此の我亦為世父の文是なり、妙楽大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩の畜生と釈し給えり」

このように、

主―我此土安穏
師―常説法教化
親―我亦為世父

と分類し、三徳を仏の絶対条件として示されているのである。

「主師親御書」には（全集三八五頁）、

「釈迦仏は我等が為には主なり師なり親なり一人してすくひ護ると説き給へり」

「南条兵衛七郎殿御書」（全集一四九四頁）、

「釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり、我等衆生のためには阿弥陀仏・薬師仏等は主にてはましませども親と師とには・ましまさず、ひとり三徳

をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏に・かぎりたてまつる、親も親にこそよれ釈尊ほどの親・師も師にこそよれ・主も主にこそよれ・釈尊ほどの師主はありがたくこそはべれ」

と、文上では久遠実成の釈尊を主師親として示されている。しかし、ここに顕われる脱益応仏昇進の迹仏は文底の久遠元初本因妙の教主の前には、末法本未有善の荒くれ凡夫を救い切る真の主師親とはなり得ないのである。

しかるに「諫暁八幡抄」には（全集五八七頁）、

「涅槃経に云く『一切衆生の異の苦を受くるは悉く是如来一人の苦なり』等云云、日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし」

とあり、

「一切衆生同一苦」

を「抜苦与楽」の主師親の働きによる大慈大悲は、末法今日日蓮一人の振舞いによってまかなわれるものであると示すのである。

詮じつめて「産湯相承事」には（全集八七九頁）、

「日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿量品に云く、『今此三界皆是我有主君の義なり　其中衆生悉是吾子父母の義なり　而今此処多諸患難国土草木　唯我一人能為救護師匠の義なり』と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり、日蓮大恩以希有事・憐愍教化利益・我等無量億劫誰能報者なるべし」

と示され末法に久遠下種をせんが為に三徳を有しその働きをするのはこの日蓮なりとされているのである。

このように「主師親の三徳」は説明することも明々白々の、

(1)仏の働き

(2)三世常恒、滅不滅の立場における成仏得道の主、成仏得道の師、成仏得道の親

(3)久遠元初本因妙の教主、自受用報身如来の当体、人法一箇の本仏大聖人が末法衆生の主師親

この三点をもって日蓮大聖人の信仰をする人間ならばわきまえていかなければならないはずである。しかるに池田氏が示す所の「主師親」戸田は、この三点のいずれを有するというのか？　何をもって、

「人類の師」

というか？　何をもって、

「師と冥合」

というか？　先に引用した開目抄の、外道の「主師親」にも劣るものである。

本当に正法を伝える信仰者の発想とは思えないのである。これ等のまちがった思想プラス

「学会は寸分違わず御書を実践している」

との論調が加われば牧口・戸田・池田が仏の生れ変りになるのはむしろ当然で時間の問題であったのである。

この狂いを池田氏はどのように訂正し、学会員はどのように反省し勉強したというのか、成仏を求める心があるならば仏性の叫びを聞きたい。

☆「師弟不二」という池田氏の考え方、アイデアというものは、「人間革命」の中によくよく見せていただいた。その上で本来「師弟不二」とはどういうことかを概略いえば、

たしかに日蓮大聖人の仏法は「師弟子の法門」といえるように、師弟の関係を最も重要視した仏法である。それは「一代聖教大意」にも（全集三九八頁）、

「此の経は相伝に有らざれば知り難し」

として我見・偏執の信仰をやめなければならないからである。「日有雑々聞書」にも、

「信心と云えば一人して取り難し、師弟相対して事行の信心を取る」（富要二巻一六五頁）

と示され又「化儀抄」には（富要一巻六四頁）、

「高祖已来の信心を違へざる時は我等が色心妙法蓮華経の色心なり」

とあり、これを堀上人は釈して（富要一巻一七六頁）、

「仏法には師匠の意中に違はぬが血脈の正しき法水の清らかなるものなり、仏法の大師匠たる高祖日蓮大聖人開山日興上人已来の信心を少しも踏み違へぬ時、末徒たる我等の俗悪不浄の心も、真善清浄の妙法蓮華経の色心となるなり」

と示され、文底よりの仏の「如我等無異」の心に我々凡夫がなりきれるか否かは、この「師弟不二」の筋目にかかっているのであるということになるわけで、日興上人御自身も「佐渡国法華講衆」に対して与えられた御手紙には（法主全書一巻一八三頁）、

「この法門は師弟子をただして仏になり候。師弟子だにも違い候へば、同じ法華を持ちまいらせて候へども無間地獄に堕候也」

と信徒を誡しめているように、自分が成仏を求めて行くには何をもって「師」とすべきかは信仰の全てを決定してしまう問題であり、これを間違えるならば堕地獄は疑いなきものである、ということである。

日蓮大聖人は最蓮房に与えられた御書に（全集一三四〇頁）、

「御状に云く去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は、自今以後は人数ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に相存ず可く候云云、

経の文には『在在諸仏の土に常に師と倶に生れん』とも或は『若し法師に親近せば速に菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん』とも云へり、釈には『本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住せん』とも、或は云く『初此の仏菩薩に従って結縁し還って此の仏菩薩に於て成就す』とも云えり、此の経釈を案ずるに過去無量劫より已来師弟の契約有りしか、我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国にうけ・忝くも諸仏出世の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事・是れ偏に過去の宿習なるか」

と示される意味も、法を中心とした「依法不依人」における師弟の関係をここに示しているのである。文中には「化城喩品」の

「在在諸仏土常与師倶生」

の経文を引き、続いて「法師品」「玄義」「文句記」を引用され、その意味を、

「此の経釈を案ずるに過去無量劫より已来師弟の契約有りしか、我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国にうけ、忝くも諸仏出世の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事・是れ偏に過去の宿習なるか」

と経・釈の意味を解釈し、

(1)無量劫からの師弟の契約

(2)諸仏出世の本懐である南無妙法蓮華経に縁すること自体が過去の宿習である

との二つの要素を示すが(1)(2)どちらも「法」を源として師弟を論じているのである。

それにもかかわらず「化城喩品」の、

「在々諸仏土常与師倶生」

を池田氏は「生死一大事血脈抄講義」の中において、

「代々の会長と共に生れ変ってくることが、『在々諸仏土常与師倶生』である」

と講義したのである（このテキストは全面的に回収し、訂正した本を会員に配布することを約束したが、末端の人々には渡っておらず、その責任・行動はまったく怠っている為、過去のことでなく、現在も如実に放置されている誤りである）。

正しく末法我々衆生においては（同抄、全集一三四二頁）、

「設い又在在諸仏土・常与師俱生の人なりとも・三周の声聞の如く下種の後に・退大取小して五道・六道に沈輪し給いしが・成仏の期・来至して順次に得脱せしむべきゆへにや、念仏・真言等の邪法・邪師を捨てて日蓮が弟子となり給うらん、有り難き事なり」

と示されるがごとく、

「日蓮が弟子となり給うらん、有り難き事なり」

との心を拝する時、どの国土にあっても久遠元初本因妙人法一箇の教主に縁を結び俱に出生する、

「俱出霊鷲山」

「常在霊鷲山」

の宿縁こそが「在々諸仏土常与師俱生」なのである。故に大聖人は同抄に（全集一三四二頁）、

「実に無始曠劫の契約・常与師俱生の理なれば・日蓮・今度成仏せんに貴辺豈相離れて悪趣に堕在したもう可きや」

と問われていることは、実に真の経文の意味を解釈し、心を込められているのである。

日有上人は（富要二巻一五三頁）、

「下種と云うは師弟相対の義なり」

と示され、私達の「師」として悉有仏性の種を覚知し植えつけ示されてくれるものは何かといえば、

下種＝師弟相対の義

の筋道において、本師大聖人からはじめてそのことがなされ出発しているのであるということである。さらに日有上人は（富要二巻一六〇頁）、

「上行菩薩の御後身・日蓮大士は九界の頂上たる本果の仏界と顕れ、無辺行菩薩の再誕・日興は本因妙の九界と顕れ畢りぬ、然れば本果妙の日蓮は経巻を持ちたまへば本因妙の日興は手を合せ拝したまう事、師弟相対して受持斯経の化儀・信心の処を表したまふなり、十界事広しと云へども日蓮日興の師弟を以って結帰するなり」

（独一本門の本因妙の法の中において本因・本果のたてわけをし、本因妙中の「本果（仏界）」本因妙中の「本因（九界）」の立場にここでは分けている。）

このように大聖人を拝する日興上人の姿をもって、

「日蓮日興の師弟を以って結帰するなり」

と、「師弟不二」のあるべき源を、示しているのである。

このように、日蓮正宗における師弟とは、大聖人を根本の正師と拝し、種脱の法門から文上釈迦を廃し、

一切衆生を弟子と決するところから、すべてがはじまってくるのである。

この点を踏みはずし、混同した人間が、古くは五老僧であり、波木井実長である。

そして新しくは「人間革命」を見る限り、創価学会の多くの人々である。

「五人所破抄」に、

「先師聖人の親り大聖の付を受けて末法の主為りと雖も、早く無常の相を表わして円寂に帰入するの刻五字を紹継するが為に六人の遺弟を定めたもう」(全集一六一〇頁)

として、本因妙の五字・妙法蓮華経の広宣流布を目的にして六老僧を定めたのであるから、その根本の師は全て大聖人となることは明らかである。

それにもかかわらず、日興上人以外の五老僧は「天台沙門」と名のり、波木井は「我が師は日向」と暴言するにいたって文上に執し、謗法を恐れず師弟乱脈をもって信仰の根源を見失うにいたったわけである。しかれば「富士一跡門徒存知の事」(全集一六〇一頁)における、

「一、五人一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、

(中略)

一、五人一同に云く、聖人の法門は天台宗なり、仍って比叡山に於て出家授戒し畢んぬ」

との五老僧の主張と、

「我々は学会員である。寺信心はいけない」「学会の信心を離れて功徳はない」「学会があったおかげで」「学会精神」「学会教学」「学会の寺」「学会側の僧侶」「学会活動」「学会葬」「入信前の宗教日蓮正宗」

等々の示すものは、「五人一同に云く」と同様に、

一、日蓮大聖人の法門は創価学会にしか生きていない。

一、日蓮大聖人の法門は学会にしかないから学会において信心しなければ本当の信心とはいえない。

と、本師を忘れているにもかかわらず、珍妙な五老僧をしていわしめるような主張が「師弟不二」の言葉を独善の為利用されて出て来るのである。

以上「人間革命」の文中にある師弟観の誤りを指摘しながら申し上げて来た。

我々衆生は、本仏大聖人の前に一切が弟子であり、そして正しい信仰を志し教える人間は、何が師であるかを伝えてはじめて信仰者といえるのである。

「代々の会長は人生の師」

という説明付けをして創価学会はとくとくとしているが、日蓮大聖人の信仰を心懸る人々の人生とは？　その柱とは信仰そのものではないのだろうか？　ならば、

「人生の師も大聖人」

であって然るべきではないか。

○法華を識る者は世法を得べきか

○体曲れば影ななめなり

○日蓮は日本国の主師父母なり

との言葉を見る時、代々の会長（池田さん）に、それほどの説明付けをして何んの意義があるのか？　と問いたい。そして「人生の師」などと意義付けをする以前に、「師弟不二」の本来の姿をスリ変え見失なわせたこの罪をどのように削除し訂正し懺悔したというのであろうか。この点も問うものである。

日興上人は池田氏の様な浅薄な「師弟」に執して信仰と思いこんでいるならば、このような姿勢こそ「師敵対」と教えているのである。

「うちこしうちこし、ぢきの御でしと申やからが、しやう人の御ときも候しあひだ、ほんでし六人をさだめおかれて候。そのでしのけうけのでしは、それをそのでしなりといはせんずるためにて候、あんのごとくしやう人の御のちも、すえのでしどもが、たれはしやう人のぢきの御でしと申やからおほく候。これらの人ははうぼうにて候也。御こうしうらこのむねをよくよくぞんぢせらるべし恐々謹言」（法主全書一巻一八四頁）

このように「佐渡国法華講衆御返事」に示されているのである。つまり、

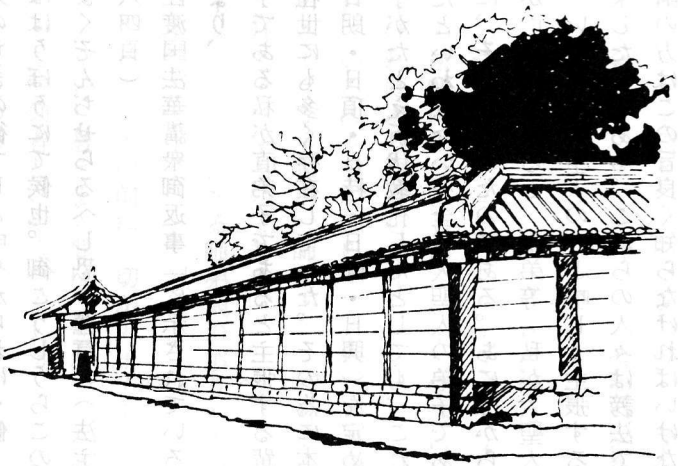
「私が直弟子である私が直弟子であると主張する輩が大聖人の在世にも多く存在していた。その為に本六（日昭・日朗・日頂・日持・日向・日興）を定め、それ等の弟子がたとえ折伏教化したとしても、これは私の弟子だといわせない（全て大聖人の弟子であるから）為に、それを定めたのである。あにはからんや大聖人が亡くなられると、末弟等『私が大聖人の直弟子だ、いや私が大聖人の』と喧しく主張する輩が多く出来したのである。これらの人々は謗法である。法華講の方はこの旨良く知らなければいけない」

との旨を大聖人滅後四十二年の元亨三年にあえていわなければならなかった日興上人の悩みを池田氏は深く拝すべきであろう。池田氏は誰の弟子で、学会員は誰の弟子か、本当の「師弟不二」とは何か。

創価学会の立てる「師弟」とは、大聖人を根源とし

ない謗法の師弟であり、ある時は牧口、ある時は戸田、又ある時は池田、そしてある時は大聖人というカメレオンのような師弟であり、邪義謗法の師弟であることが明白にされたものと思う。

依って、全ての人々が「人間革命」に潜む「師敵対」の謗法を再確認し、創価学会の信心でなく日蓮大聖人の信心を伝え、実践していただきたいのである。



二、創価学会における広宣流布観

「広宣流布」という経文（言葉）は、釈尊の四十余年の説法、つまり法華経以前の御経においては説かれなかったものである。つまり「広宣流布」とは、正しい法であるからこそ、

「広く宣し流布する」

ということであり過去、現在、未来の三世に常住（流布）たらしめ、一切の国土に宣（かよわ）すという意味をそこに含めているのである。「法華経薬王菩薩本事品第二十三」には（大石寺版開結六〇五頁）、

「我が滅度の後、後の五百歳中に、閻浮提に広宣流布して、断絶して、悪魔、魔民、諸天、竜、夜叉、鳩槃茶等に、その便を得せしむること無けん」

と「広宣流布」という一つの姿を見ることが出来るのである。

釈尊は「無量義経」において、

「四十余年未顕真実」

と爾前権経を破し、爾前権経において示すことのなかった、

「広宣流布」

という経文をこの法華経に示し、わけても文底独一本門の信仰を心がける信仰者は、

「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して」

という後の五百歳（末法）に注目しなければならないのである。

かりに、大日経、阿弥陀経、金剛頂経、般若経、そして不立文字、教外別伝とされる禅宗の誦する矛盾多き幾多の経典においても又律宗のたてる梵網経、法華経においても、新興宗教の誦する御経のダイジェストのような理解のさまざまな矛盾の中にあって、

「広宣流布」

と示される法華経を用い読誦したとしても、それは毒の器で薬を飲むようなものであり、権実雑乱の最たるものといえるのである。

故に、

「広宣流布」

とは法華経という潔白な経典以外の物と混同するわけにはいかないのである。

そしてこの、

「広宣流布」

の使命をになう者は、正しい法の根源を見失なわず、一宗のものや、一団体個有の物という考えでなく一閻浮提に広く断絶せしめることなく伝えて行くという、出発の種を遵守することが大前提となるのは当然である。

これらのことをまず頭に入れて考えていただく時、「人間革命」にみえる創価学会の「広宣流布」は、日蓮大聖人の示されたそれとは全く違う似て非なるものであり、政治に対する考え（王仏冥合論）も、まったく違う主張をしているので、合せてその批判を加えたいと思う。

「人間革命」の中には一見理解し易い論調もある。初めに二、三あげると、

「……『牧口先生は謹言実直な方で、私と性格が正反対、夜なかまで先頭に立って折伏をつづけられ、弟子は後の方で、やァやァと掛声ばかりかけていた』

（中略）

『私は先生と反対に、後に立って皆さんを指揮し、広宣流布に邁進したいのです。

天皇に御本尊を持たせ一日も早く御教書を出せば広宣流布が出来ると思っているものがあるが、それはまったくバカげた考えで、時代錯誤もはなはだしい』」（五巻五四頁）

初めの謙遜？は兎も角、「天皇に御本尊を持たせ云云」以下の考えはなかなかよろしい。

今だに、天皇陛下が信仰すれば天地がひっくりかえるほど好転するかの如く考えている人々がいる。

謗身、謗家、謗国の三種の謗法から考えれば、「広宣流布」も「成仏」も、信心の厚薄という個人個人の心に出発しているものである。

仏法は元来、主権在民（衆生）であり、一人の為政者や政治システムなどに依って左右される教えは、本当の仏法ではないのである。

故に、この部分は良いのである。

しかし、この後に述べている結論がいけない。

「『そうなる頃には、ここにいる皆さんは、どうなっているか。たいしたことになっているでしょうね。まァほんの一例をあげておくが、いまここにいる青年たちは、まず国会議員か、それ以上の地位についている』

（中略）

この推戴式に列席した青年は、そのなかから国会議員も出るだろうとの、この日の戸田の予言を、いま身をもって実証しているのである。それも二人、三

人ではない。しかも、今後の実証は、さらに明白になっていくだろうことは、もはや否定しえない事実である」

これら立身出世が身の福運のように考え、結論であるかのように示し、又続けて、

「戸田は時間の経過を気にしていた。そして最後の結論を急いだ。御本尊様のこのような真の功徳が解る位を究竟即というのですが、この位の前の分真即、これが折伏することなのです。（この教義解釈は実に珍妙で疑問である）一対一の膝づめ談判によって、広宣流布をやりなさいというのであります。御勤めして、御本尊にあれくれ、これくれと、功徳をねだるような横着な信心でなく、ほんとうに折伏に身を入れ、人々に悪口をいわれ、バカにされても、ますます御本尊を護持した時、そこに厳然として功徳が現われるのです。はじめから御本尊様は、おがんでくれなどとは、決していっておられません。われわれの方からどうか拝ませてくださいと願ったのです。……いま、私たちは、本門の戒壇を建てるための一つ一つの土台石を運んでいるのです。そのために今後、どしどし無理な注文を、皆さんに出すことと思うが、ぜひ通していただかなければなりません』

（中略）

戸田との師弟の真の絆は、戦後はじめてこの時に決定したといってよい」

このように、二転三転としながら、

「大聖人から戸田へ」

のスリ変え作業が営まれる。

そして最終結論は、

「戸田との師弟の真の絆」

ということになってしまうのである。

その過程にある、

○天皇中心・為政者中心の広布観の否定

僅かにこの一点だけは、わからないでもない。

しかし、それさえも、その結びにくる、

「戸田の予言」

「戸田との師弟の真の絆」

「いまここにいる青年たちは、まず国会議員かそれ以上の地位云云」

等の考え方に至っては、まことに開いた口がふさがらない。

次に理解し易いと思える点は（五巻一六六頁）、

「一国救済とは一国折伏のことだと強くむすんだ。

今、日蓮正宗の信者を見るに、流罪死罪を恐れず一国の謗法をせめんとするものがあるか。今もし強く一国の謗法をせめたら、事を世法によせて、必ず国王の難があるであろう。

しかし、この難をおそれて身の安危をはかっては、仏勅にそむくことになり、仏勅にかしこみて法戦をいどまば、この難がある。いかんがはせんである。しかし吾人は仏の子であり、弟子であり、臣下である以上、たとえ身命に及ぶとも、仏のお心にかなわんために、一国折伏の大旗を樹てなくてはならない。これが末法今時の信者の決意でなくてはならない。『秋霜烈日たる、戸田城聖のこの精神――これこそ今日の学会を生んだものであり、われら弟子たちが、更に未来へと受け継ぐべき大精神でなくてはならぬ」この点も非常に単純に読み流せるように思える。しかし、

○戸田城聖のこの精神

○これこそ今日の学会を生んだもの

と結ばれたとき、戸田がここに示した事柄は、大聖人（仏）に報いんとの心情であると共に「日蓮が如くなりたくば、日蓮が如くせよ」と示した精神にほかならないではないか。「折伏下種」の源は大聖人より伝えられた教えであって、だれも肩代りすることの出来ない精神ではないのか。久遠本仏の末法万年にわたる魂魄からみて、池田大作氏がいう、

「戸田城聖のこの精神」

とは、大聖人と巧妙にダブらせた精神なのである。要するに、今日の学会は、戸田の精神を原点にし、生まれたものであると、主張しているに外ならない。

三番目に理解し易い主張は、大変問題はあるが、広宣流布に対する情熱という点である。（五巻一九九頁）

「新しき世紀を創るものは、青年の熱と力である。吾人等政治を論じ教育を勘うる者ではないが、世界の大哲・東洋の救世主・日本出世の末法御本仏たる日蓮大聖人の教を奉じ、最高唯一の宗教の力によって人間革命を行い、人世の苦を救って各個人の幸福境涯を建設し、ひいては楽土日本を現出せしめんことを希う者である。

（中略）

吾人等はこの偉大なる青年学徒の教団を尊仰し、同じく最高唯一の宗教に随って人間苦の解決、真の幸福生活の確立、日本民族の真の平和、苦に没在せる東洋の浄土化を弘宣せんとする者である。

（中略）

第一は、無智の者に永遠の生命を訓え、日蓮正宗の御本尊の絶対無二なる尊貴を知らしめて、功徳の大海に思うがままに遊戯する自由自在の境涯を会得せしむる為に、忍辱の鎧を着、慈悲の利剣をひっさげて戦うのである。

第二は、邪智邪宗の者に、立正安国論の根本義たる、邪宗邪義は一切この世の中の不幸の原因であり、諸天善神は国を捨て去り、聖人は処を去って世は皆乱るるなりと訓え、邪智邪宗をひるがえすよう、智慧の鎧を身にまとい、彼等が執着の片意地を、精進勇気の利剣をもって断ち切る戦いである。

第三に衆生を愛さなくてはならぬ戦いである。しかるに青年は親も愛さぬような者も多いのに、どうして他人を愛せようか。その無慈悲の自分を乗り越えて、仏の慈悲の境地を会得する、人間革命の戦いである。

而して、吾人は更に、諸兄等の行動について、望む所をもつものである。

第一に絶対的確信に充ちたる信仰の境地に立脚し、信行において微動だにすることなく、唯一無二の御本尊を主・師・親と仰ぎ日蓮大聖人と共にいますの有難さに溢れ、地涌の後身を確信することである。

（中略）

広宣流布の時は近く、日蓮正宗の御本尊流布の機は、今まさにこのときである。故に三類の強敵は、まさに現れんとし、三障四魔は勢いを増し、外には邪宗邪義に憎まれ、内には誹謗の声ようやく高し。驚くなかれ、この世相を。こは、これ、聖師の金言なり。されば諸君よ、心を一にして難を乗り越え、若き花の若武者として、大聖人のおぼえめでたからん願うべきである。愚人にほむらるるは、智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは、一生の名誉なり。心して御本尊の馬前に屍をさらさんことを。

昭和二十六年九月二十八日

創価学会会長　戸田城聖」

以上の点においても、

○世界の大哲

つまり大聖人を哲学者たらしめている学会のくせや、

○仏の慈悲の境地を会得する、人間革命の戦いである。

という、段階論的考え方、会得とは「冥合」と違う意味であり、人間革命等と共通するものではないのである。又、地涌の菩薩の後身との表現も教義的におかしいのである。

○日蓮正宗の御本尊流布の機は、今まさにこのときである。

という本尊流布イコール折伏（広宣流布）の考え方が、ここにも頭をもたげているのである。

当然全てではない。しかし本尊を持せることが、下種であるという論法をもって行われた折伏には、

イ、神札的に、もっていれば良いことがある。

ロ、確信御本尊（今月これだけの折伏をぜったいにやりますとの確信のもとに、身替り御授戒、代理下附をもって御本尊を受けてくる）

ハ、浮浪者に一食おごって寺へつれてくる。

ニ、街頭で女の人が通りがかりの男をつかまえ寺へつれてくる。

ホ、軟禁状態で信仰しないという者をしめあげる。

このような姿の折伏が存在したことを、心ある信仰者であるならば良く御承知のことであろう。

このような折伏であっても、今りっぱに信仰を持続されている人々はいるかもしれない。又逆に、誠心誠意の折伏を受け入信した人々の中にも退転者はいるであろう。しかし前者は、信仰者にあるまじき、「折伏」といえない折伏なのである。そしてこのような状態がまったく寝耳に水であった日蓮正宗の我々僧侶は、同罪として猛省し信者のまちがった教義に基く姿勢を恥じるべきである。

以上あげた三点の内には相当、不思議な教義解釈もあるが、まだ「広宣流布」という考え方においては理解し易い思考がされていると思われるのである。とりわけ、三番目の、

「御本尊を主・師・親と仰ぎ」

との正しい信仰認識は、実にこの「人間革命」の「主師親」の規定の中において、この「青年訓」の一行のここのみが、正当に示されているのである。実に貴重であり、且つおそろしいことである。

このように「人間革命」の中にも三点ほど理解し易い論点が見えるが、それではこれらの考え方を柱として「広宣流布」の認識が構築されているのかといえば、そうではないのである。つまり大きくくい違う一つの要素が（十巻二八一頁）、

「政治は好きか嫌いかといわれれば、嫌いである。できることなら権謀術数を事とするこの世界からは身を避けていたい。しかし、広宣流布の途上、どうしても通過しなければならない道程であるとしたら、好き嫌いはいっていられない。権謀術数を事として人をあざむく政治家でなく、妙法の土壌から見事な

真の政治家を育てなければならぬという重い使命を担う広宣流布の一目的から、このたびの戦いに手を染めなければならなかったのだ。

（中略）

伸一は、ここであの『雲海の着想』の要点を語った。――宗団としての本来の宗教活動が、一時的とはいえ、政治的野心をもつように、世間に誤解されることは、長い将来を思うとき、創価学会にとってプラスなのか、マイナスなのか。広宣流布という広大深遠な活動が現実的になり、政治的偏向に傾かざるをえなくなっては、広宣流布は矮小化されてしまうのではないか。

（中略）

事実、明治にはいって日蓮大聖人の仏法を国家主義的に解釈し、時の権力者に迎合して敗戦まで国家的計略の具にしてしまった田中智学などの一派もいた。これこそ大聖人様の仏法の歪曲であり矮小化です。われわれは愚かな轍を踏んではならないが、その危険はつねにあると自覚しなければならない。創価学会という仏勅を奉じる宗団を政争の具に巻きこんではならないのだ』

『ということはコントロールの問題ですか？』

『いや戦術の問題ではない。広宣流布ということは、人類社会の土壌を深く耕し、豊かな稔りある土壌に変えることにある。そうじゃないか、こんどの戦いだって妙法を抱く立派な真の政治家らしい政治家を、まずこの土壌から育てなければならぬということに目標を定めて、とりかかった仕事だ、序の口の序の口だが意外に大がかりになってしまった。どこまでいっても、信心であり、そして人間に的があるのです。一人の人間における偉大な人間革命を、終始一貫問題にしなければならない。そのために政治の分野にも真の政治家を育成することが、これからの課題となってきたところだよ』

（中略）

戸田は伸一と語りあっているうちに、知らずしらず広宣流布の未来図を話していた。話しているうちに、おのずと描かれたのである。

伸一は、その未来図を遠く望むように眼を細めていった。

『創価学会が社会に拡散して壮大な人間触発の大地となる。そこから、人類の輝かしい新しい未来が眼前に展ける、まことに雄大な構想ですね――ずいぶん先の将来に思えますが……』」

このようにして「広宣流布」「政治」における考え方は例をあげる迄もなく、妙法に出発するといいつつ欠くべからざるものとして同等に論じられているのである。

はたして「広宣流布」とは、どういうものであるのか。

次にそれを述べてみたい。

「広宣流布」とは一天四海皆帰妙法ということであり、皆帰妙法ならば一人の成仏即ち一切衆生の成仏ということでなければ「広宣流布」ということは成り立たないのである。

最初に引用した薬王品の、

「我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶して、悪魔、魔民、諸天、竜、夜叉、鳩槃茶等に、其の便を得せしむることなかれ」

又、法師品に（開結三九四頁）、

「若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以って諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華経を説くべし」

と、示され、一切衆生に仏性を覚醒せしめ、一閻浮提に広むべき正法の説き方（心）を示されているのである。

勧発品にも（開結六七〇頁）、

「如来の滅後、後の五百歳に若し人有って、法華経を受持し、読誦せん者を見ては、応に是の念を作すべし。此の人は久しからずして、当に道場に詣して、諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を転じ、法の鼓を撃ち、法の螺を吹き、法の雨を雨すべし」

このように、弘むべき法を広め、法の正しかるべきことを明かす必要を示しているのである。

このように法華経に示された所の「広宣流布」とは、大聖人を久遠元初本因妙の教主として定め、独一本門の法より見て、教のみあって行証なしの末法万年の闇を照し出す要は、大聖人所持の法しかないということである。なにゆえ「後の五百歳」とわざわざ示しているかといえば、末法の本未有善の仏縁のない荒凡夫の我々を、久遠元初の根源の法（釈尊はじめ十方の仏菩

薩も根源と奉る所の法）をもって救い切ることこそ、本当の成仏ということであり、イコール広宣流布ということなのである。

故に大聖人は「選時抄」に（全集二五八頁）、

「彼の大集経の白法隠没の時は、第五の五百歳当世なること疑いなし。但し彼の白法隠没の次には法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の一閻浮提の内八万の国あり、その国々八万の王あり、王々ごとに臣下並に万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり」

と示し、白法隠没の後の世を救い広宣流布せしめる法は南無妙法蓮華経の五字七字の題目のみであることを明し、一閻浮提、八万の国に、今、日本に弥陀の悪法（弥陀称名）が広まっているように、この称名念仏を破して、念仏をやめて南無妙法蓮華経の題目を広宣流布すべきである。――として目標を示されているのである。

このように、

「法華折伏破権門理（法華経の信仰は折伏であり権門の理を破すべきこと）」

の教えから考えてみても、一切衆生に正法の種を結縁せしめることは「広宣流布」を主張する我々にとって大切なことである。しかし、

広宣流布＝折伏 ↓ 本尊流布

という図式にのって、世間の人々に、なにしろ渡せば良いというような本尊流布の競争は、絶対にやめるべきである。

第二祖日興上人は「日興遺誡置文」において二十六ケ条を定め、その定めた理由として、

「夫れ以みれば末法弘通の恵日は極悪謗法の闇を照らし久遠寿量の妙風は、伽耶始成の権門を吹き払う。於戯仏法に値うこと希にして喩を曇華の蕊に仮り類を浮木の穴に比せん、尚以て足らざる者か、爰に我等宿縁深厚なるに依って幸に此の経に遇い奉ることを得、随って後学の為に条目を筆端に染むる事、偏に広宣流布の金言を仰がんが為なり」（全集一六一七頁）

と示し、この後に順々と二十六ケ条を教示するわけである。つまり、広宣流布と、出された本尊の数・量とは無関係であり、一人一人の極悪謗法の闇を照らし、権門の理を吹き払うことが大切とされるのである。

「富士一跡門徒存知の事」に（全集一六〇六頁）、

「日興の弟子分に於ては在家出家の中に身命を捨て或は疵を被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書写し奉り之を授与する者なり」

と示されることを拝するにつけ、今日の状態は、その精神なき者にまでも与えて喜ぶという、世間の言葉でいえばインフレ気味の様相を呈している。ゆえに、御本尊にシミがつこうがヒモが切れようが、やぶれたり、やぶられたりしても裏から紙をはり、又自分で表具屋にもっていって「御詫びの題目をあげていました」と指導したりされたりして、それが信心だと思っている。守る信心・伝える信心をしていない人々が大部分であることも事実なのである。同抄（全集一六〇五頁）、

「五人一同に云く、本尊に於ては、釈迦如来を崇め奉る可しとて既に立てたり、随って弟子檀那等の中にも造立供養の御書之れ在りと云云、而る間、盛に堂舎を造り、或は一体を安置し、或は普賢文殊を脇士とす、仍って聖人御筆の本尊に於ては彼の仏像の後面に懸け奉り又は堂舎の廊に之を捨て置く（以下続くが略）」

このようにして、大聖人御真筆の御本尊は多数にわたって五老僧や、不信の徒に不敬されたということを考えるならば、

「『日蓮大聖人は、まず題目を流布され、次に佐渡において本尊をあらわされました。故に本門の戒壇を先にするのでなく、また御寺をつくることが先でもないのです。仏法の方程式を間違えて順序を逆にしてはならぬし、あわてることもない。

邪宗ではありますが、題目の流布はもはや日本中でできております。次は本尊流布なのです。ともかく、御金言の通り、この正法は必ず東洋に、世界に広まっていくのです。もし、そうならなければ、大聖人は大嘘つきになってしまう。必ず、かならず広まることを自覚しなさい。

ここに、われわれの使命があるのです。われわれには、まったく本尊流布以外になにものもないのであります』」（「人間革命」五巻一九一頁）

「思うに宗門興隆の基礎は、僧俗一体となっての本尊流布の活動にあると存じます」（「人間革命」六巻二五五頁）

「昭和三十三年の関西二支部（大阪支部・堺支部）の本尊流布の激増は全国でも稀にみる進展をしている。この一年間に、大阪支部・堺支部ともに、三倍前後の伸び率を示していた。関西の大法は朝日が昇るがごとく広がっていったのである」（「人間革命」

十巻四〇頁）

「本尊流布の旗は翩翻とひるがえるようになったのでございます」（「人間革命」十巻一七七頁）

このような本尊流布をもって広宣流布と考えることは、はたして大聖人のいわれる広宣流布なのであろうか。

「日蓮が魂」を形に執して御本尊と考えるのか？　御本尊にしたためられた心である、

「日蓮が魂」（久遠元初の妙法）を流布せしめるのか――心か形なのか。形をさげすむわけではないが、形体を至上のものとし、究極とするのであるならば、学会における本尊流布とは教義の上から摧尊入卑、本末転倒といわなければならない。

先に挙げたイロハニホに加え、

「この信心をすれば、金銀財宝ザックザックで、だまって座れば治らぬ病気はない」

式のすすめ方が、はたして「折伏」といえるであろうか？　そして我々僧侶の中にも本尊流布＝広宣流布の考え方を是認・黙認している人々がいるということは、信者さんの罪よりも重い罪として懺悔・反省しなければならないと痛切するのである。しかも一方において、創価学会は「広宣流布」という目的において、日蓮正宗の僧侶は眼中になく、相談相手でもなかった（なり得なかったのかもしれないが）点が、「人間革命」の中に於いて見られるのである。それは前に引用した、「人間革命」十巻（二八八頁）の、

「創価学会が社会に拡散して」

という考え方もそうであるし、又、六巻（二一〇頁）には、

「十条潔が、そのあとをうけていった。

『宗会議員は、先生一人を、寄ってたかって袋叩きにしようとしているというよりほかに考えられません』

『袋叩きか。私を袋叩きにして、それで宗門はどういうことになるのだ。宗門の未来が開けるならいい。しかし、学会の存在なくして、広宣流布の進展は断じてない。今、いちばん肝心なことは、いったい誰が広宣流布のために、本当に骨身を削っているのか見きわめることではないか。それは、いったい誰なんだ！』

戸田は、激しい感情を内に秘めて、強く言い放った。

『私一名を指名して、登山禁止とし、創価学会の登山は差し支えないということなのか。これは、会長

と会員の離間策だ。私の大講頭を罷免するということも同じだ。広宣流布をしようとする和合僧を破ろうとすることは要するに、広宣流布を妨害することではないか』

（中略）

令法久住のためにはあくまでも戦わねばならない。御本尊様がそれをお許しにならないわけがない』」

これは「小笠原慈聞事件」後の宗会決議決定をくつがえす時の理由の披瀝である。

「学会でなければ広宣流布は出来ない」

この言葉の精神は学会が草創より培ってきた考え方だが、この精神が、どのように考えたならば、

「僧俗和合」

たるものに結びつくのであろうか。それぞれの信仰者に与えられた分野の立場で本仏を中心におき話し合って行く所に「広宣流布」の実体が明確になるのであって組織至上主義における広宣流布観は、ファッショの気配を持つ危険を有するのである。

我々僧侶も創価学会にこのような独善的自負心を持たせ、宗門を見限った態度を持たせ、力が正義であるという、力にまかせる態度に彼らが出たのであるならば、余計に、幾度も幾度もガラス張りの話し合いをもうけ、政治的取引きがあってはならなかったはずである。直接折伏する立場は今日信者さん達の手にまかされている。しかし信仰の分業化に我々僧侶があぐらをかいていたとするならば信徒に見限られる以前に、日蓮大聖人に見限られる食法の僧といわねばならないのである。

次に教義的にまちがった展開と言えることは（人間革命六巻二三三頁）、

「最高の文化は最高の智恵によらなければできない。これは当然のことだ。ところで最高の智恵というのはなにを指していうか、これが問題です。なんだと思う？』

（中略）

『南無妙法蓮華経です』

『そうだその通りだ。これ以上の智恵は現代に断じてない。この智恵のあるかぎり、人類は多くの危機を避けて、やがては絢爛たる文化を開くことができるだろう。このために、ただ一つ人類に残された道——広宣流布の必要があるのです。しかし今は、この智恵を知って驚嘆している者は、人類のなかでわずか数万を出ない。いくら知識人面をしていても、知らないというだけならまだしも、知ろうともしな

いで軽蔑している。今に見なさい。驚きあわてる時が必ずきます。人類がもつ最高の智恵なんだもの、誰でも頭を下げざるをえなくなる時が必ずくる。

この意味からすると、広宣流布ということは、最高の文化運動といって差し支えない。確信をもって、しっかりやろうよ』」

又（人間革命十巻一三六頁）、

「『わが会長戸田先生は日夜私たちに〝日蓮大聖人の時代に還れ、大聖人の信心に帰れ〟と申され〝それ以外に日本のしあわせも、個人の幸福も、真実の仏法もない〟といわれております。今、文化闘争について考えてみますときに、日蓮大聖人の御在世当時も、また平安時代も、あらゆる時代、あらゆる国を通じていえることは、その時代、その国の中心となっている宗教、思想がすべての経済、政治、社会、あるいは文化全体を規定する根底になっているという事実であります。

（中略）

『したがって、大聖人の御活動、戦闘というものは、むろん根底は宗教者としての戦いでありますが、同時に立派な文化運動であったことを確信するものであります。今、展開されている広宣流布達成、令法久住のための活動も、大聖人の昔に還った同じ闘争であることを、私たちは知らなければならないと思うのであります。

私たちの開かれた広い分野にわたる文化闘争も、また広宣流布達成のための闘いであることを確信して、不幸の民衆を勇気をもって救い切っていただきたいと思います。ただそのことのために、情熱をたぎらせ、本日の総会を契機として、ひたすら進んでまいろうではありませんか』」

「随筆人間革命」（一四〇頁）、

「宗教は、平和と文化をもって社会に直結する原動力である。わが創価学会は党派を超え、相対的なイデオロギーを超越して、この文化と平和の大運動を定着させ、軌道に乗せたのである。これが仏法の、円教の定義であり、私の未来にわたって遂行したかった構築である」

「随筆人間革命」（一四五頁）、

「広宣流布とは、最高の文化活動である、と伸一は常づね信じていた。信条の実現として、彼は、体育大会の開催に向かって、ひとり奔走したのである」

このようにくりかえされる、

「広宣流布とは妙法を基調とした文化活動であるか

ら、広宣流布とは文化運動だ」との論調は実に不思議な主張であり、自己満足の、我田引水的発想としかいえない。

○「成仏」を最大の目的にしつらえている大聖人の仏法が文化運動とどのような道理でつながるのか？

○本門戒壇の御本尊が御安置されている所は文化のフェスティバル会場なのか？

○現世利益の論法では信仰の目的は文化となるのか？

○文化闘争イコール広布達成の闘いとは、大聖人の教義のどこにあるものなのか？

○日蓮が魂は文化の根源なのか？

○大難四ケ度小難数知れずとの数々見擯出・不自惜身命の法華身読は文化発展の為なのか？

等々、これらの事柄について、正法流布の付嘱的一状況にしかならないであろう文化を、信仰と同じ比重であるかのごとく誤解せしめることは、信仰するものにとって大聖人に対する違背であるとしか言えないのである。

「人間革命」の筆者は全ての人々にこの点、明確にしなければならないはずである。

たしかに広宣流布の具体的様相を示された大聖人の御教示は少ない。その中でも「如説修行抄」には（全集五〇二頁）

「法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなく・せめをとして法王の家人となし天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壌を砕かず、代は羲農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覧ぜよ、現世安穏の証文疑い有る可からざる者なり」

このように示され、一般世間風にいえば、ユートピアのように理想社会の様相を表現しているのである（一般世間の人々は、「日蓮の独善、宗教の硬直化」と一笑に付すかもしれないが、日蓮正宗の信仰者は、宗祖の言葉として、まじめにこのことを目的にもっているのである）。この中で大聖人は、あくまでも、

「妙法ひとりはんじょうせんとき」

と示し、正しい法が正しくひろまっていってこそ――はじめて平和な社会が……といわれているのである。

大聖人のここまでの表現を見た所で、別に創価学会のいうような文化運動につながる事実などありはしないのである。

昭和四十五年五月三日、創価学会第三十三回本部総

会の席上、池田大作氏は「言論問題」が公明党がらみの権力行使の問題に発展してしまった経過から「政教分離」を世間に発表したのである。しかしながら今だに、選挙前、選挙中になれば、

○選挙運動してこんなに功徳があった。

○応援しないと罰があたる。

等と発言（指導）したり思ったりされていることは事実なのである。昭和五十五年五月二十八日NHKの十時からのテレビ放送において、「与党と野党の討論」という番組が放映された。この時公明党の黒柳・市川氏両名は自民党からの政教分離の実際の姿を質問されるや、黒柳氏は、

「十年前の何んのことをいっているんですか、公明党の古い体質で今日の姿を云々いうのはおかしいんじゃあないんですか（取意）」

とトボケ、市川氏は、

「特定宗教の教義に左右されるものではない（公明党並びに政策が）」

と平静をよそおい発言しているのである。

ならば今日、政教分離であるはずの皆さん方の中にあって、公明党を支持することが、

「広宣流布の為」

「王仏冥合の為」

「人間革命の為」

「法戦」

「選挙の為の題目闘争」

と現実に思い込み、やっている創価学会の姿は、公明党も迷惑な話であり、大聖人も迷惑な話なのである。大聖人も選挙の為に、

「日蓮が魂は南無妙法蓮華経にすぎたるはなし」

との題目が唱えられようとは決して思いもされなかったであろう。

「王仏冥合」なる言葉も、「三大秘法禀承事」（全集一〇二二頁）、

「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覚徳比丘の其の乃往（むかし）を末法濁悪の未来に移さん時云云」

と示され、王・大臣・民衆の一切衆生が正しく本門の本尊、戒壇、題目の三大秘法の仏法を持ち一人一人の信仰者が本当に有徳王、覚徳比丘のように「一心欲見仏・不自惜身命」の信仰をする時が真の「王仏冥合」であり事の戒法が一人一人の心に打ち立てられる時であると示されているのである。しかるに創価学会における「王仏冥合」の理解は、

○多数決でどうこうとか
○議席数がどうこうとか
○政権を取ってどうこうとか
○得票数がどうとか
○F取り（友達票）がどうとか
○題目闘争がどうとか

との「王仏冥合」の感覚であるが、この「三大秘法禀承事」の御文に照して、どこが「王仏冥合」であり「広宣流布」なのか。

「王臣一同に本門の三秘密」を持たせる「破邪顕正（折伏）」なくて、どのような幸せを求めているというのか？

大聖人が生涯の根本精神とされた「立正安国論」にも、この「三大秘法禀承事」と同様に、まことの「王仏冥合」「安国」というものを明確に（全集三二頁）、

「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり仏国其れ衰んや十方は悉く宝土なり宝土何ぞ壊れんや、国に衰微無く土に破壊無んば身は是れ安全・心は是れ禅定ならん、此詞此言信ず可く崇む可し」

と、結論として示しているのである。

前提↓まちがった信仰を改め正しい仏法に一刻も速く帰依するならば、

←

一、三界は皆仏国
二、仏国は衰えない
三、十方は全て宝土
四、宝土は破壊されない
五、国が衰えず国土が破壊されなければ
六、人身は安全であり
七、心は常に安静を保てる

このような順序で御教示されているのである。

この「立正安国論」の精神は四八頁に引用した「如説修行抄」における御文を、日寛上人（大石寺二十六世）が「如説修行抄筆記」（宗学要集四巻四一一頁）に、「当体義抄」（全集五一二頁）との御文を合せ対比し、

A法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなく・せめをとして法王の家人となし

B天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時

A′正直に方便を捨て

B′但法華経を信じ

C万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば
D人法共に不老不死の理顕れん時
E吹く風枝をならさず雨壌を砕かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得

C′南無妙法蓮華経と唱う人は
D′煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一身に顕われ
E′その人所住の処は常寂光土なり

このように同趣旨の御教示として表現をしているのである。

「当体義抄」の御文は一人（一身・一念）の心の作用を中心に信仰心の具体的あらわれを示し、「如説修行抄」の御文は社会における人々（集合体・団体）の信仰心が社会・国土をどのように変えて行くのかということを明確に示しているのである。それゆえ、個々の人々の一念に正しい法が受持されれば、三世・十方の国土を照し、清浄化せしめ、その法は又、一念におさまる――ということになるのである。つまり前に引用した「立正安国論」の、

「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ、然れば則ち……」

の精神は、そのまま「如説修行抄」「当体義抄」につらぬかれるものであり、信心と社会と国土の正常な理想関係を示しているのである。このことが、

「仏法は体のごとし、世間はかげのごとし。体曲れば影ななめなり」

に順ずる「王仏冥合」の意味であり、一切衆生ことごとく、

「人法共に不老不死の理顕（ことわり）れん時」

との、一人の成仏はもとより、一切衆生の成仏を根幹とした広宣流布をもって、はじめて真の寂光土たり得ることが出来るのである。なればどうして、

「選挙が信心だ」

等と考えることが出来るのか。即物的に、

○吹く風が枝をならさないようについたてを作るように国に談判しようとか
○雨壌を砕かないように危険地域を整備しようとか
○代は義農の世となる為に作物の流通と作付けの指導にあたろうとか
○今生に不祥の災難にあわないように国民全ての行動をテレビで追い監視してあげようとか

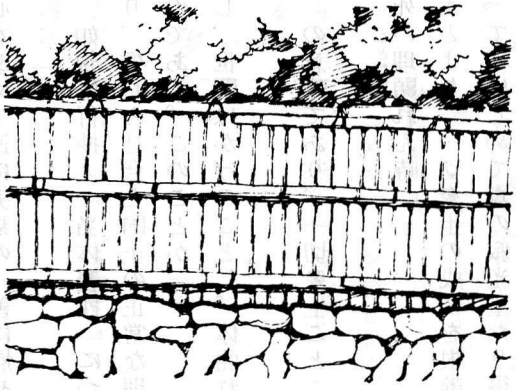
○長生の術を得る為に二百才位まで生きれる薬を研究させようとか

全てを即物的な政治・経済の思想をもって唯物的幸福感を期待するのであれば、我々は何も信仰を持つ必要はないし、十界の生命や一念三千の法も必要のない教えにすぎないのである。そして何よりも、大聖人は、久遠元初の大法を我々末法の衆生に対して示し残されることはなかったはずである。

実に創価学会が夢想し実践している、選挙と権力の信心混同の延長線上に想起している唯物的広宣流布観、唯物的幸福論は、現世利益を前面に押し出し、途方もないまちがいをひき起しているといえるのである。

世間の方々の中にも、もし創価学会や日蓮正宗を宗教団体でなく政治団体として見ている方々がいるのであるならば、とりわけ創価学会の一人一人は、日蓮大聖人の信仰をしているはずが政治参加することが大聖人の教えであるように多大な錯覚と法を謗っていることであり、本来大聖人の教えはそのようなものではないということを信仰していない人からも教えてやっていただきたいのである。

譬えば、創価学会の主張する「政治観」や「国家観」「王仏冥合観」は、イランのホメイニ体制の中で行われている政教一致と同質な状態を目的にしているのである。しかしこれは大聖人の教えに反する謗法の思想であり、謗法の信仰となるのである。



小結

以上、

○創価学会における師弟観

○創価学会における広宣流布観

とりあえず今回はこの二点を挙げて述べた。しかし創価学会の悪しき詭弁は、なかなか巧妙に出来ている。その為に明確に分析することは難しいが、何故「人間革命」が謗法の書であるかを知っていただく手懸りとしていただければ幸いである。

この文章を書いている折にも、聖教新聞（昭和五十六年五月十九日）に掲載された記事を教えてもらった。その記事は読者の「投書欄」で、

「弟の嫁の母が亡くなったのは三年半前のことです。（中略）息を引き取るまで『人間革命の歌』をうたい『牧口先生、戸田先生、お傍にまいります。今から死出の旅へたちます』とはっきり言い残し、家族の見守る中でなくなったのです。『先（まず）臨終の事を習うて…』と御金言にありますがあのような立派な臨終は初めて見ました」

このような記事を眼にした。もちろん大聖人が教示されている臨終ではない。しかしこのような大聖人なき師敵対の邪信、盲信の姿は、創価学会の師弟観を説明して余りあるものであり、その上自分達の正当性を立証する為にカムフラージュとして大聖人の教えを引くという、創価学会の体質を見事に露呈している。

又、「広宣流布」の観点も、文中において指摘したように、「なにしろ御本尊を持たせることが出発であり、それが折伏であり、大聖人の本意である。――故にそれを実践している創価学会が一番正しく全てが正当化される」という暴走の理屈の上にたてられているのである。今日においてもこれらの謗法体質を改善しようとしない創価学会の姿は、何を広宣流布するかという信心の本質からはずれ、創価学会が大きくなることが広宣流布の道であると考えているにすぎない。まさしく謗法であると断定せざるを得ないのである。

そしてこれらの全ては、著者と称する池田大作氏を頂点にした創価学会の体質から、とめどなくたれ流される邪悪な事実であることを、本人達が気付かなくてはならない。

この小誌を(上)として、後日引き続き「人間革命」にまつわる教義歪曲の事実を指摘させて頂こうと思う。

日蓮正宗 在勤教師会 発行

1981・8・1